



0049093-000

263. 2-644

高等科国語

文部省・編

文部省

第2

昭和19

AHJ

263.2
644

高等科國語

二

文部省



高等國語

二

文部省



發行所寄贈本

263.2
644

~~263.2~~
631

目 録

一	富士の高嶺	四
二	單獨飛行	六
三	飯を打つ	十六
四	田園の曲	二十三
五	級會で話したこと	二十八
六	姫路城	三十六
七	旅の思ひ出	四十三
八	輸送船	五十

九	ハワイ海戦	七十二
十	亡きあと	八十六
十一	春の水	八十八
十二	單語のいろく	九十
十三	雪の山	百五
十四	山ざくら花	百十六
十五	大君のへに	百十九

附 録

一	滿洲を守つたもの
二	滿ソ國境
三	監視哨日記
四	蒙古草原

一 富士の高嶺たかね

山部赤人やまべのあかひと

天地のわかれし時ゆ 神さびて高く貴き 駿河なる
富士の高嶺を 天の原ふりさけ見れば 渡る日のか
げもかくろひ 照る月の光も見えず 白雲もいゆき
は、かり 時じくぞ雪はふりける 語りつぎいひつ
ぎゆかむ 富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に

雪は降りける

柿本人麻呂かきのものひとまろ

ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つ
らしも

安倍仲麻呂あべのなかまろ

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月
かも

大伴家持おほのともやかもち

天皇の御代榮えむと東なるみちのく山にこがね花咲
く

二 單獨飛行

一

拜啓、秋冷の候、父上様を始め、皆々様御壯健の由、何よりの御事
 と御喜び申し上げ候。この頃は、取り入れに引き續き、麥蒔きの
 季節にて、御多忙のほど察し奉り候。何とぞ、おからだ御大切に
 願ひ上げ候。さて、本日は、入隊以來、念願致し候、單獨飛行首尾よ
 く許可せられ候につき、喜びのまゝ、御報告申し上げ候。教官の
 懇切なる御指導はいふまでもなく、日頃父上母上始め、皆々様の
 温かき御激励の賜ものと、深く感謝仕り候。右、單獨飛行の模様
 を、別文の通り相認め候間、拙文にて恐れ入り候へども、御判讀御

想像成し下され候はば、幸甚の至りに候。先づは御報知申し上
 げたく、かくの如くに御座候。拜具。

年 月 日

耕 一

父上様

二

朝露を含んだ練兵場に全練習生が集合して、嚴かな朝會をし
 た——澄みきつた朝の空を仰ぎながら。

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな
 の御製を拜誦した時は、全身が清められる思ひがした。

身支度をして飛行場に行くと、既に練習機は、三十機きちんと
 勢揃ひ（勢揃ひ）をしてゐた。これらはみんな、整備練習生が一心になつ

て、手入れをしてくれたものである。

飛行服に着かへ、整列をして分隊長の訓示を受けた。

昨日までは、教員と同乗して操縦を學んで來た。今日は練習飛行の上、成績の良いものに單獨飛行を許可する。

一日として忘れることのできなかつた單獨飛行がいよいよ許されるのだ。うれしくてならない。分隊長から更に、

「一人になると、とかく固くなり過ぎて失敗しがちだから、落ち着いてやれ。」

と親切な注意があつた。

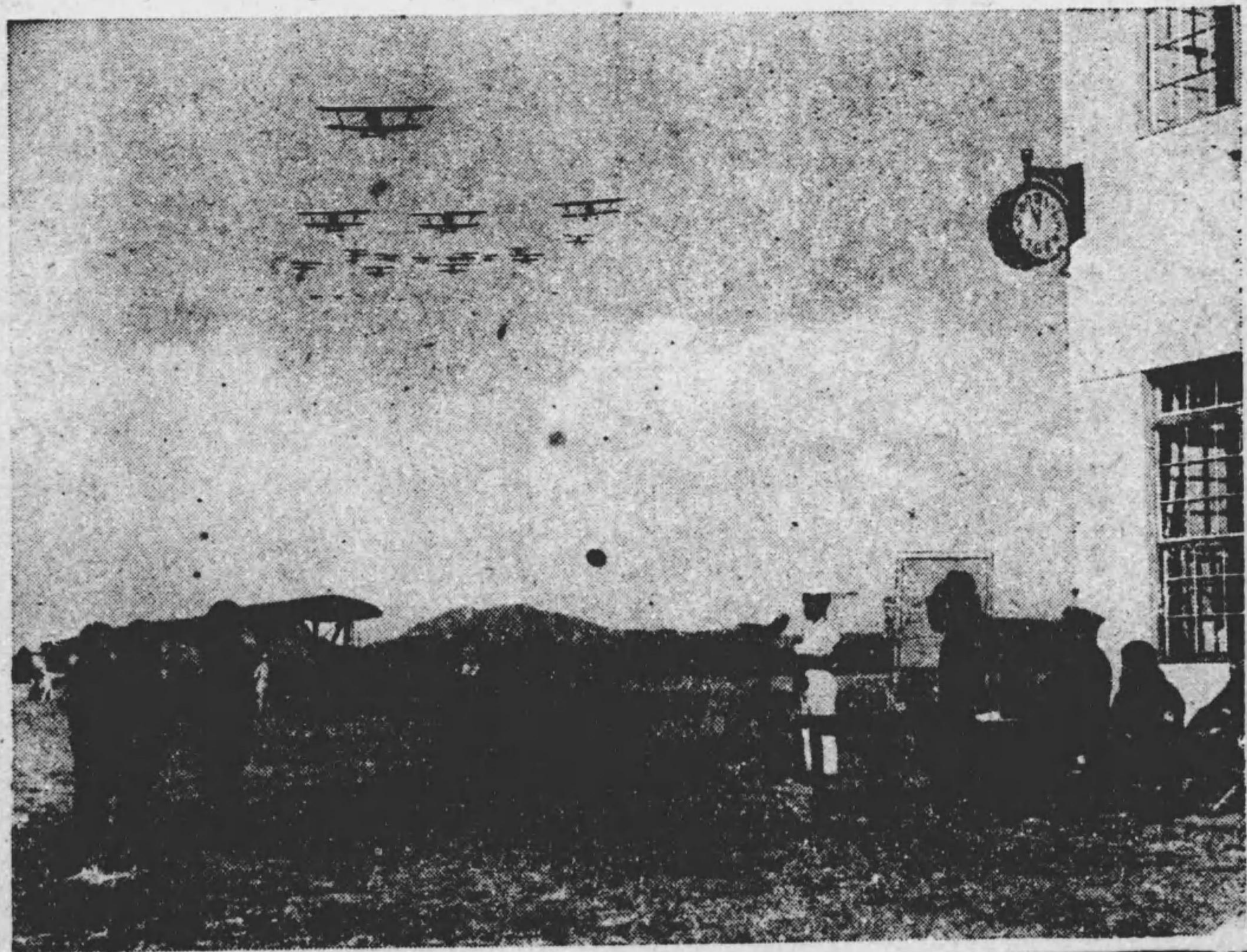
飛行練習が始り、仲間の者は、順々に教員と同乗して、飛び立つて行く。今日は、みんな張りきつてゐる。自分の番が來たので、

駈足で上官の前に進む。きうして、

「岡田練習生、同乗出發します。」

と大きな聲で報告し、すぐ教員と練習機に同乗して、飛行練習に移つた。

先づ、誘導コースを一廻り飛んでから着陸し、再び上昇して同じコースを廻つて着陸する。更にもう一度くり返すのであるが、離陸よりも、飛行よりも、む



づかしいのは着陸の仕方である。したがって操縦の成績はこの着陸の具合によつてきまるといつてよい。

第一回の着陸は、機首をさげ過ぎたため機體がはずんでジャンプしてしまつた。二回めには、ほどよい三點着陸ができた。三回めには、心にゆとりもできてゐたので、一層うまく行つたやうに思つた。しかし、同乗の教員は、良いとも悪いともいはない。やはり不合格かなと思ひながら、練習機からおりる。すると、教員は私を分隊長の前につれて行つて、

「岡田練習生の單獨飛行を許可します。」

と報告した。私は、夢ではないかと思つた。仲間の者も、よかつたな。「よかつたな。」といつて、心から喜んでくれた。

單獨飛行を許された者は、いかにもうれしさうな顔をして集つてゐる。やがて私の名が呼ばれた。私は分隊長の前に立つて、

「岡田練習生、離着陸、單獨出發します。」

と元氣一ぱいで報告をした。ついさつきまで、同乗出發します。といつた者が、今始めて、單獨出發します。といふ。わづか、單獨の一語ではあるが、その中には、限りない誇りと喜びがこもつてゐる。

出發のしるしに名札を裏返して、練習機へ駈足で行く。プロペラが氣持よく廻つてゐる。赤い單獨旗を愛機の柱にしつかりと結び付け、整備練習生に感謝しながら搭乗した。落下傘を

身に着け、安全帯をしめる。かうした細かなことにも一人になると妙に氣が張る。

發動機は好調子だ。

「よしつ。」と合圖の手を舉げて、車輪止めをはづさせ、滑走して風に向かつて飛び立つた。その瞬間、那須の餘一の姿が浮かんだ。さうして、自分がひようと放つた矢になつて、今大空を飛んで行くやうに感じた。正面の筑波山が、やあ、一人歩きができるやうになつたな。」と迎へてゐる。右へ旋回すると、霞が浦が美しくただよひ、遙か遠くには東京灣が光つてゐる。再び旋回すると、秀麗な富士山が半身を見せて、おめでたう。」と呼び掛けてゐる。單獨旗は、風に吹きちぎられるほどひるがへりながら、がんばれ、が

んばれ。」と應援をする。

ふと見おろすと、飛行場は一枚の色紙が何かのやうに小さい。あそこでは、教官も、教員も、仲間も、みんな私を見てゐるのだ。しつかり飛ばなくてはと、心が引きしまる。私が、まだ國民學校にはいつたばかりの頃だつた。三機編隊で飛んで行く飛行機を見て、あゝ、して空が飛べたら、どんなに愉快だらう。どんなに勇ましいだらう。」と見とれたものだつた。それから、圖畫にはよく飛行機をかいた。自分がこの學校に志願したのも、あのをさな心の感銘が、さうさせたのかも知れない。

規定のコースを一巡して、下降する。機首に氣をくぱりながら空中滑走し、滑り込むやうに三點着陸をする。自分ながら、氣

持のよい着陸ぶりだった。すぐ安全帯をはづし、落下傘を取りのけ、愛機からおりて分隊長の前に進んだ。

「單獨歸りました。」

と大聲で報告をする。分隊長は、微笑をた、へてうなづかれる。私には、それが無限の激励のやうに見えた。

名札をもとに返して席にもどると、教員が、

「うまくやつたぞ。」

といひながら、肩をた、かれた。親身になつてこれまでに教へられた教員のありがたさが、しみじみと胸にこたへた。

この日の飛行練習を終へてから、分隊長は、次のやうな講評をされた。

「單獨着陸の様子を見ると、まだ十分ではない。機首を起し足りない者が、逆により上げ過ぎる者もある。これは、操縦の拙劣にもよるが、第一、腹のすわりが悪いからだ。」

次に、教官から注意があつた。

「今日、單獨飛行を許されなかつた者もあるが、落膽することはない。一日でも多く、教員から學ぶ機會が與へられたと思つて、更に奮發することだ。又、單獨飛行の許された者は、慢心を起してはいけない。慢心を起せば、進歩は止る。着實にやる者だけが、最後の勝利を得るのだ。」

私はこれを聞いて、ふと、この春卒業した先輩のことを思ひ出した。さうして、北に南に、勇ましい若鷲として目ざましい活躍

をしてゐることを考へ、私たちもその後には續く者として、りつぱな空の勇士となることを、堅く誓はないではゐられなかつた。

三 鉄を打つ

○月○日

四時半起床。いつものやうに、みんなて寮をきれいに掃除する。今日は一日氣持がよかつた。作業前の體操も、行進も、愉快だつた。日頃は何とも思はないみんなの作業服や、作業帽まで、かひぐしく見えた。一つの目當てに向かつて心魂を打ち込む光景は、こんなにも美しいものかと思ふ。工場から湧き立つ音響は、盛りあがる日本の力強い呼吸のやうに聞えた。



今日も一日、エヤーハンマーをしつかり握つて、何百となく、何千となく鉄を打ち込んだ。この鉄は、爆撃機の胴體下面覆ひを作るために打ち込むのだ。打ち込み方が悪くて、継ぎ合はせたジュラルミンの部分品が、空中分解でもしたらどうする。一つの鉄でも、おろそかに打つことはできない。しつかり頼みますよ。と祈る私の心に答へるやうに、ジュラルミン板は凄いい響きを立てる。今日は、おかげで一本の鉄もしくじらなかつた。

去年の今頃は、エヤールハンマーをか、へることも怖しく、打つには打つても、打ち過ぎてしまつたり、打ち足りなかつたり、曲げてしまつたりしたものだつた。今から思へば、これも一つの思ひ出だ。熟練はありがたい。とにかく、今日は一日楽しかつた。

○月○日

今日も鉄打ち。朝から頭が重かつたが、午後になると、いつの間にかなほつてゐた。病氣のために、もし鉄打ちを失敗して、せつかくの部分品を廢物にしては、申しわけがない。私のところへ届くまでに、ずぬぶんいろくな手数がか、つてゐるのだ。製圖切斷を経て、鑄^{くわ}がか、り、型に當てて、丹念に曲げたり延したり、寸分の狂ひもないやうに整へられて來たものを、どうしてこ

こでむぎくくと廢品にしてよからう。この一念に、病氣などは吹き飛んでしまふのだ。

寮に歸ると、みんなが夕刊を見てゐた。爆撃機の編隊が、今しも雲の上を進んで行く寫眞が出てゐる。みんなは、何にもいはずに唯見とれてゐた。ひと事のやうには思へない。心から、武運長久をお祈りするばかりである。

○月○日

今日、胴體の下面覆ひが組み立てられた。いつも思ふことだが、出來上つてみると、意外に大きなものである。疊六七枚はらくに敷ける。これが、爆撃機の腹のところを包むのだ。つまり爆撃機にとつては、金時さんの腹掛けである。積み込んだ爆弾

をしつかりと包み、いざ目的地といふ時に、この腹掛けを兩方に開いて、思ひきり爆弾を投下するのだ。

製圖の友だちも、切斷や旋盤の友だちも、みんな出來上つた下面覆ひを見に来る。さうして、思はず手で撫でてみる。この腹掛けを掛けた爆撃機は、どれほど大きなからだだらう。それが日の丸を附け、がつしりと翼を張り、發動機を響かして悠々と飛んで行く姿は、想像するだけでも頼もしい。

○月○日

こんな夢を見る。

よい月夜である。どこからか、白い蝶が飛んで來た。その蝶が、時々銀色にひらめく。「蝶ぢやありませんよ。あなたの飛行

機ですよ。」といふ聲がする。よく見ると、月に照らされて、あの腹掛けもちらつと見える。「さあ、お乗りなさい。」——私は、浦島太郎が龜に乗るやうな氣持で、いそくと乗り込む。いきなり宙を飛び出す。星に手が届きさうだ。「わたしは、あなたに打つてもらつた鉄ですよ。」わたしも。「わたしも。」——星の群れがこんなことをいふ。風のうなりだが、プロペラの響きだが、烈しい物音がするが、それも遠のいて行く。と、急に眠くなつて、私はたわいもなく眠つてしまふ。「よく眠つてゐること。」と、さゝやく聲が聞える。確か、母の聲であつた。

○月○日

久しぶりに、母から手紙が來る。元氣で暮してゐること、今度

末の妹も働きに出たので、母は一人ぼっちになつたこと、その働
くところが落下傘製作の工場であること、すぐの妹は従軍看護
婦だし、これで三人の姉妹が、それぐお役に立つたこと、うちに
は男の子はゐないが、母は肩身が狭いとは決して思つてゐない
こと、今年、國民學校に入學した隣りの五郎さんが、大きくなつた
ら、私の造つた飛行機に乗るんだといつてゐること、その時は、末
の妹の落下傘を着け、もし名譽の負傷をしたら、すぐの妹になほ
してもらふのだといつてゐることなどが、おもしろく書いてあ
つた。

○月○日

今まで晝間勤務だつたのが、今日から夜間勤務になる。眠く

なりはしないかと案じてゐたが、そんなことはなかつた。深夜、
この工場だけが、うなりながら活動してゐるのを見ると、いかに
も鎬しのぎを削る生産戦のさ中に立つてゐるといふ感じが、ひしひ
と迫る。眠氣どころではない。

この間、組み立てた胴體下面覆ひが、爆撃機に取り付けられて、
すぐ出陣して行つたさうだ。私たちの仕事は、文字通り第一線
の延長である。職場は直ちに戦場であり、鉄を打ち込む力は、ま
さに日本を守る力なのだ。

夜明け頃に、雨がさつと來た。

四 田園の曲

落日

野は、里は、たそがれそめて、
 連なれる山のいたゞき、
 かゞやかに光にほへり。
 あや雲の波たゞよひて、
 大いなるくれなゐ色の
 もゆる日は、今し落ち行く。
 ことばなく眺めてあれば、
 わが胸の奥にぞとほる。

落つる日の尊き光。

月と草木とのさゝやき

いつしか雨はれて明かるき空よ、
 さえとくと美し、
 ぬれたる月の光。

まばらなる立木の枝より、
 雫の落つる音しげく、
 なほ降れる雨かと思ふ。

一もとの老木の根株皮むけて
身をあらはせるに、

照りたる月は鏡のごと。

水白く流る、橋を

わが行けば

わが影はあり、水の上に。

われは聞く、こよひ

月と草木のさゝやくを、

白き魂の聲するを。(三木操ノ作ニ據ル)

朝

霧はれて行く遠近とほざかに、

黄金の村はあからみぬ。

和らぐ聲は起り来て、

谷の底より立ちのぼる。

きらめく露は日をむかへ、

今日新たななる幸を吸ふ。(三木操ノ作ニ據ル)

五 級會で話したこと

私は今日のこの級會で、百姓になるといふことを、皆さんにお話しようと思ひます。

その前に一つ前置きとして、お話しななければならないことがあります。この夏ひでりが續いて、お米の收穫があれほど心配されたのにもかゝらず、思つたよりも好成績で、稻刈も無事にすんだことは、皆さんも既に御承知の通りであります。

ところで、この七月の初めであります。學校からの歸途一人の友人と一しよに家路へ急ぎました。厳しいひでりだったので、田は一面水がなくなり、稻も大變弱つておました。あらこ

ちで、雨乞ひをしましたが、ほんたうに雨でも降らなければみんな枯れてしまふばかりでした。

四五町ほど歩いて行つた時、向かふに青々と元氣よく稻の育つてゐる田が見えました。廣さは、せいぐ一段歩か一段五畝ですが、それは、今私と一しよに歩いてゐる友人の家の田であります。周圍の田に比べて不思議なほど、みづくしく見えます。さうして、その田の側に、村長さんと縣廳の人が、立ちながら話をしておました。

「この田は、不思議によく出来てゐる。」
と、縣廳の人が村長さんにいひますと、
「あれは、感心な家の田です。」

といひながらちやうど通り合はせた私の友人をさして、

「さう、この子のうちの田ですよ。」

と附け加へました。

「君のうちの田か。大變成績がい、ね。どうしてかうなのか、話してくれたまへ。」

と、縣廳の人が聞きました。友人はにこ／＼してゐるばかりで、別に答へようとしません。私が側から、

「だまつてゐないで話したまへ。」

と小聲でいふと、友人はぼつ／＼話しました。

「私の父はこの春苗代の種蒔きがすんだ頃、應召しました。母と二人でその後を引き受けて、田や畠の仕事をしてみたりま

した。すると、かうしたひでり續きなので、私は、毎晩井戸から水を汲んでは田へ流し込みました。お國の實を枯らしては、すまないと思つたからです。それに、稻がりつばに育てば、父もきつと喜んでくれると思つたからです。唯それが母にわかつては、かへつて心配をかけると思ひましたので、毎晩母が眠つてから、水汲みをしました。」

「それは感心だね。この田がこんなによく出来たのも、君の真心が通じたのだ。ありがたい話を聞かせてもらつた。」

と、縣廳の人は、感動しながら友人の手を取りました。友人の手には、まめが一ぱい出来てゐました。

「さうだ、村の人たちも、一つ君の意氣込みでやつてもらはう。」

どうしても、稻を助けなければならぬ。と、村長さんも力強いはれました。

この事がわかつてから、村の人たちは、目ざましく働き始めました。その上、やがて雨も降つて、村の田は生き返つて來ました。この秋の收穫が思つたよりも好成績であつたのは、全く私の友人のけなげな働きがそのもとをなしてゐるのだと、私は思ひます。さうして、その友人といふのは、ほかでもありません、私たちの級友中村君であります。

こゝまでお話すれば、私がどうして百姓にならうと決心したかは、おのづからわかりのことと思ひます。私の家も、御存じのやうに農家ですが、田といひ、畠といひ、ほんの僅かあるに過ぎ

ません。しかし、私一家にとつては、かけがへのない大切な土地であります。

日露戦争に出征して、旅順攻撃に参加した祖父も、こゝから征途に就きました。開拓民となつて大陸に渡つた叔母も、こゝから出かけたのであります。今、南の空ではなぐしと戦つてゐる兄も、やはりこの土地から出發いたしました。先祖以來この土地に生まれ、この土地に住み、さうして、この土地で死にました。つまりこの土地は、私の家の生きた歴史を物語つてゐるのであります。この尊い田や畠を受け継いで、これをりつばなものにして行きたいといふのが、私の百姓を志す一つの理由であります。

但し、かういつた小さな自分の家の感情だけに、動かされたの
てはありません。なるほど、田や畠は先祖傳來のものであり、現
に、私の家の者たちが耕したり、種を蒔いたり、収穫したりしてあ
ります。しかし、よく考へてみると、この土地はもと／＼日本のあ
りがたい國土であります。神が生み給ひ、しろしめし、永遠に守
ります尊い國土であります。たとへ、少しばかりの田や畠であ
つても、それは、この國の寶として考へなければならぬもので
あります。

随つて、四季折々の作物は、私の家の物でありながら、その實神
の恵みを受けたお國のありがたい作物であります。先日、米
を少しでも多く供出するやうにとのお達しがありました。が、こ

れは全く當然のことでありまして、私は、こんなお達しを頂く前
に、お國のために差し出さなければならぬと思ひます。今日
本は國運を賭しての決戦の最中でありまして、前線の勇士たち
に、ひもじい思ひをさせてはなりません。米一粒でも、いも一つ
でも、多くたべてもらひたいと思ふ心で一ぱいであります。こ
れが、私の百姓にならうとする第二の理由であります。

今日の級會で、加藤君は少年航空兵に、藤井君は通信兵に、野田
君は産業戦士になる話をしました。これらの人たちは、皆外へ
出て勇ましく働いてくれます。そこで、私は、中村君とともにこ
の土地に踏みとどまつて百姓になり、食糧増産に専念して、みん
なの腹ごしらへを十分にしていあげるのが、お國への御奉公だと



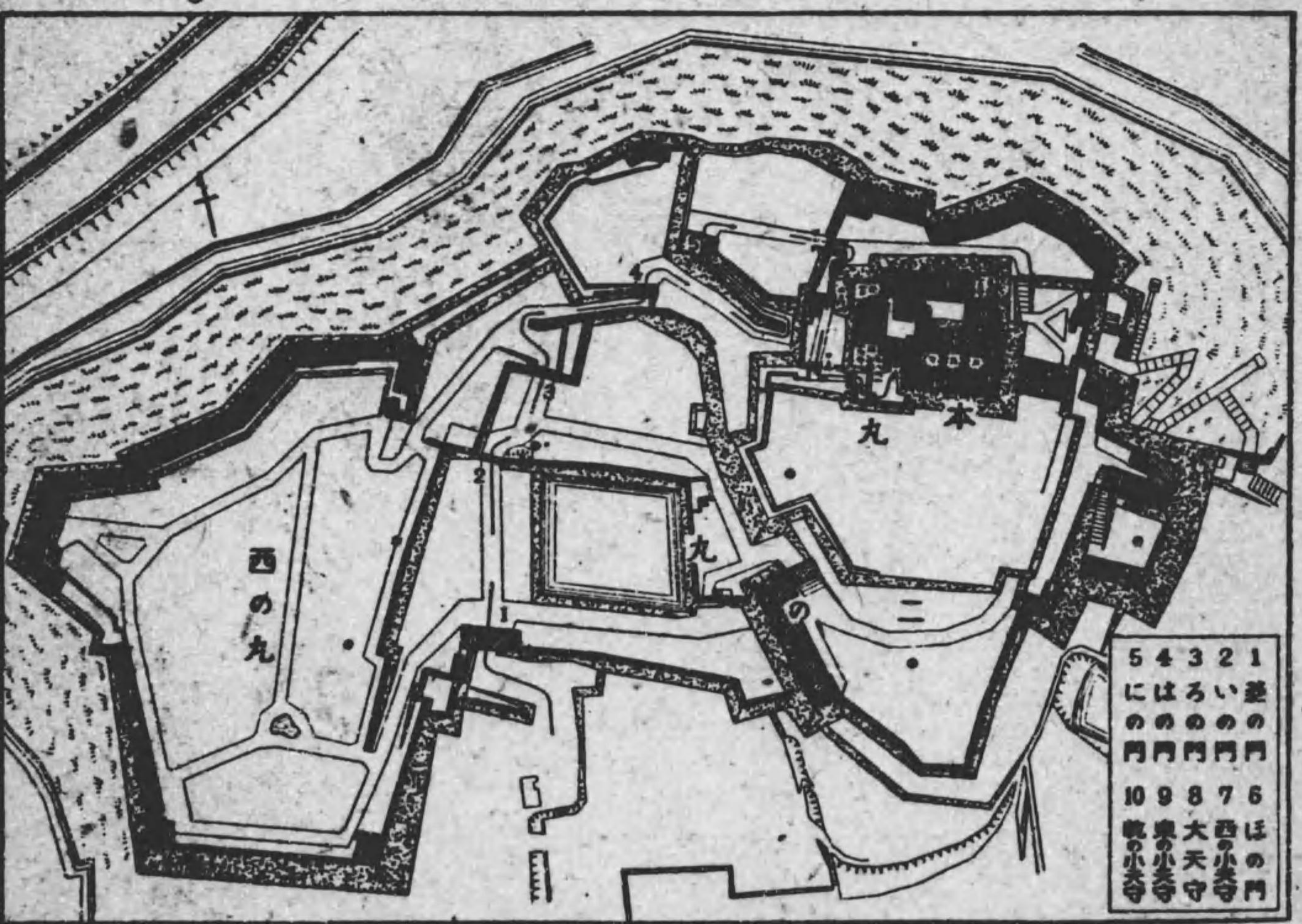
考へてゐるのであります。

六 姫路城



大手の櫻門から三の丸にはいると、姫路城の天守閣は、姫山の老松の上にその正面を見せる。まことに白鷺城の名にそむかない、美しい姿である。しかもその美の極致を、私は、菱の門をくぐつて二の丸にはいつた瞬間に見出した。

空堀を隔てて、やゝ右手に仰ぐ天守閣群は、五層の大天守を右に、三層の西の小天守を中に、同じ三層の乾の小天守を左に、いかにも調和よく、高い石垣の上に聳えてゐる。みやびやかな唐破風、すつきりした千鳥破風、それらが上下に重なり、左右に並び、千鳥がけに入りちがふさまは、まさにならかの亂舞といひたい美しさである。ところて、更に、この門をくぐり、



るの門をくゞつて、奥へくゞと進むにつれ、姫路城は唯美しいといふだけではすまされなくなつて来る。門をくゞるたびに、坂道は必ず右か左へ曲折する。道に沿つて、時に石垣、塀、櫓が層々と頭上にのしかゝる。まるで、絶壁の下を通るかたちだ。さうして、その塀や櫓にうがたれた矢狭間、鐵砲狭間が、圓形に、三角形に、長方形に、ちやうど怪物の目のやうに、私たちを見おろすのである。どんな大軍が押し寄せたとしても、この狭い谷底のやうな迷路へ導かれ、あの無数の狭間から撃ちかけられ、射すくめられては、全くだまつたものではない。しかも、道の行く手行く手は、總べて嚴重な門である。

門をはいると、多くはそこに廣場がある。一般に本丸への道



は狭く、曲折してゐるから、敵の寄せ手がもし門を突破すれば、差し當りかうした廣場へなだれ込むに違ひない。さうして、激しく押し合ひもみ合ふかれらの足もとには、意外にも、深い谷底が口をあ

けて待つてゐるのである。寄せ手が勢込めば、勢込むほど、恐らくこの見せかけの廣場が役立つに違ひない。

一きは堅固に見える「ほの門」を過ぎて、いよく本丸にたどり着いたと思ふと、そこには、いはゆる水の門が、第一から第六まで、

順々に待ち受けてゐる。數歩にして門があり、殆ど門ごとに道が曲折する。頭上には乾の小天守、西の小天守、及び大天守が、東の小天守と四つ目に並び、互に腕を組み合つて天に聳えながら、私たちを足もとにも寄せつけないといつたかつかうをしてゐる。

水の第五門は、大天守と西の小天守とを繋ぐ渡り櫓の真下になつてゐる。一たびこの門をしめ切つたら、四つの天守閣は一箇の獨立した城廓となつて、これだけでも數萬の敵に對し、いづかな動きさうにない。

外觀五層の大天守は、内から登ると七階であつた。さうして、あの美しいを見た天守の内部には、巨材と巨材が組み合つて、薄

暗い各階にももの凄く力闘してゐる。

最上階から眺めると、姫路市街はもとより、飾磨の平野が一目に見渡される。元來この城は、平野の中央や、北寄りの姫山ひめやまに據つて營まれたもので、地は南に飾磨港を控へて瀬戸内海の運輸を占め、西に中國街道を受けて、交通の要路に當つてゐる。秀吉がこゝに目を着けて城を築き、更に家康いえやすに信任された池田輝政てるまさが、百萬石の威勢と、將軍のうしろだてによつて、今日に見る優美なしかも、堅固極りないものに造り上げた。大手の門は南を固め、からめ手の門は北東を押さへてゐるが、この城の要害はむしろ西にある。眼下に見る西の丸の櫓々は、鷲山をあたかも長城のやうに覆つて、西からの見すかしを防いでゐる。呼べ

ば答へる間近さに、男山景福寺山がちやうど海中の小島のやうに散在してゐる。いざといへば、これらの小山が總べて出城となつて、この城廓の護りとなるのである。中國四國の大藩を目の上のこぶと見た家康が、輝政をしてこゝに金城鐵壁を築かせたのは、まことに故あることと考へさせられる。

南方、もしくは東方から望めば、優美そのものと思へる姫路城も、これを北から西から望む時、まるで様子を一變する。本丸の據る姫山西の丸の據る鷲山は、屏風の如く連なり、麓



に三條の堀をめぐらし、芥を知らぬ密林に覆はれ、その上にそり立つ天守閣は、あたかも司令塔の如く、數十の櫓は層々と重なり、蜿蜒と連なつて、まさに飾磨の平野に浮かぶ一大戦艦を思はせるものがある。

美しい城だとは、誰もいふ。しかも、姫路城は、當時の最も堅固な城であつた。更にいへば、本丸・二の丸・西の丸の三丸が、これほどまで完全に残つて、今日のわれわれに、昔の姿を殆どそのままに見せてくれる。まことに、姫路城は、わが國城廓建築の粹であり、世界に誇るべき國寶である。

七 旅の思ひ出

阿蘇の夕べ

山を下つて村に出た時は、もう日が暮れて、夕闇ほの暗い頃であつた。村の夕暮のにぎはひは格別で、壯年男女は一日の仕事のしまひに忙しく、子供は薄暗い垣根の陰や、かまどの火の見える軒先などに集つて、笑つたり、歌つたり、泣いたりしてゐる。これは、どこの田舎も同じことであるが、今荒涼たる阿蘇の草原からかけ下りて、突然この人里に出た僕は、しみじみとこの光景に心を打たれたのである。僕ら二人は、疲れた足を引きずつて、日暮れ、道遠きを感じながらも、なつかしいやうな心持で、宮地をこよひのあてに歩いた。

一村を離れて、林や畠の間を暫く行くと、日はとつぶり暮れた。

西の空をふり向くと、阿蘇の分脈の一峯の右に新月がかゝつて、一帯の村落をわが物顔に、青みがかつた水のやうな光を放つてゐる。頭上を仰ぐと、晝間は眞白に立ち昇る噴煙が、月の光に灰色に染まつて、夜の大空を衝いてゐるさまが、いかにもすさまじく、又美しかつた。たま／＼橋にさしかゝつたから幸ひと、その欄干により掛かつて、疲れきつた足を休めながら、二人は、噴煙のさまのいろ／＼に變化するのを眺めたり、聞くとともに、村落の人語の遠くに聞えるのを聞いたりしてゐた。すると、今来た道の方から、空車らしい荷車の音が、林などに反響しながら次第にこちらへ来るのが、手に取るやうに聞えた。暫くすると、朗かな澄んだ聲で歌ふ馬子唄が、空車の音につれ

てだん／＼と近寄つて来た。僕は噴煙を眺めたまゝ、耳を傾けて、この聲の近づくの待つともなしに待つてゐた。

人影が見えたと思ふと、宮地よいところぢや阿蘇山ふもとといふ唄を長く引いて、ちやうど僕らが立つてゐる橋の少し手前までやつて来た。その唄と聲とがどんなに僕の感情を動かしたらう。二十四五かと思はれる屈強な若者が、手綱を曳いて、僕らの方を見向きもしないで通つて行くのを、僕はじつと見つめてゐた。夕月の光を背にしてゐたから、その横顔もはつきりとは知れなかつたが、そのたくましげなからだの黒い輪廓が、今も僕の目の底に残つてゐる。

僕は、若者の後影をじつと見送つて、さうして、また阿蘇の噴煙

を見上げた。

(國木田哲夫ノ文ニ據ル)

由良の夜

春の夜は静かにふけぬ。

うまや路の並木のけぶり、

箱馬車はわだちをどりて、

宮津より由良へ急ぎぬ。

おぼろ夜の窓のあかりに、

京むすめ、難波あきうど、

尼法師や、切戸まうてや、

人の世の旅の道づれ。

物語あくびまじりに、

眠り目のとろむとすれば、

たが子にか、後うしろの方に、

をりからの追分節や。

清らなる聲ひとしきり、

谷あひにさゝらぐ水の、

咽び音に響き渡れば、

乗合は涙こぼれぬ。

月落ちてやみの夜ぶかに、
箱馬車は由良に着きけり。
人々は車を降りて、
西東路に別れぬ。

そののちや幾春經けん、
おほ方は夢にうつゝに、
忍びてはえこそ忘れね、
由良の夜の追分上手。

その子、今いづくにあらん。

思ひ出の清きかたみや、

人々の心に生きて、

どことはに姿ぞ若き。(薄田淳介ノ作ニ據ル)

八 輸送船

月のよい夜。父が新聞を広げてゐる。つゆ子が國語の本を讀んでゐる。その側で、母が編物をしながら、それを聞く。二郎が机に向かつて、一心に何か書き續けてゐる。どこかで、蟲の鳴く聲。

つゆ子「おかあさん、もう一ぺん讀んでみませうか。」

母「讀んでごらん。いゝ歌ですわ。」

つゆ子、本を持ち、聲を少し高めに讀む。

つゆ子「ちんちろ松蟲、蟲の聲、

庭の畠で、鳴きました。」

ぎんぎら葉の露、草の露、

月の光が、ぬれました。」

とろくもえる火、あろりの火、

栗がはぜます、にほひます。」

父「今夜はその歌の通りぢやないか。庭の木の葉に月が光つ

てゐるし、それに、蟲もよく鳴いてゐるし。」

母 「ほんたうに静かな夜ですね。」

つゆ子 「こんな静かな夜でも、南の方では、烈しい戦がありますのね。」

父 「さうだ。かうして、こゝで静かに暮せるのも、遠い所で、日本の兵隊さんが敵を追ひ散らしてくださるおかげだよ。つゆ子、わかるかい。」

つゆ子 「わかります。」

この時、二郎はペンを置いて、

二郎 「やつと書きあげた。」

父 「二郎は、何を書いてゐたのだ。」

つゆ子 「一郎に、いさんにお手紙を書いてゐるんですつて。」

父 「さうか。一郎も、今頃は、どこの海でこの月を眺めてゐるかな。」

つゆ子 「一郎に、いさんが、どこにいらつしやるかわからないのに、お手紙を書くなんて、をかしいですねえ、おかあさん。」

二郎 「ちつともをかしくないさ。どんな所へ行かれても、心はちやんと繋がつてゐるんだ。向かひ合つてお話しするやうなものさ。をかしくないぢやないか。」

母 「どれ、読んでごらんなさい。」

二郎、大きな聲で、手紙を読みあげる。

二郎 「いさん、お元氣ですか。今夜のやうな静かな晩でも、いさんは、輸送船で活躍してゐられるのですね。いつか、輸送

船は日本の動脈だといはれたことを忘れません。私も高等科を卒へたら、海員を志願するつもりです。うちではみんな丈夫です。今、つゆ子は、國語の本を讀んでめます。おあさんは、編物をしていらつしやいます。にいさんに送るのださうです。ではくれぐもおからだをお大事に。さやうなら。」

つゆ子「あら、たつたそれつきりなの。」

二郎「これでおしまひさ。」

つゆ子「あつけないこと。」

二郎「お前のやうに、手紙を書かないよりは、いゝぢやないか。」

母「つゆ子の負けですわね。今度は、つゆ子も手紙を書いておあ

げなさい。」

つゆ子「私は、いつもちやんと、心でにいさんとお會ひして、お話をしてゐるんですもの。だからいゝの。」

二郎「魔法使ひぢやあるまいし、つゆ子の思つてゐることなんか、一郎にいさんに届くものか。」

この時、玄關の呼び鈴が鳴る。つゆ子が取次に出て行く。「あら、一郎にいさん。」たゞ今、「まあ、今にいさんのお噂をしてゐたところよ。」——こんな聲が聞えて来る。二郎がとび出して行く。やがて、一郎の手を、二郎とつゆ子が引いて来る。

一郎「おとうさん、おあさん、たゞ今歸りました。」

父 「お、元氣でよくもどつたね。」

母 「まあ、お帰りなさい。」

母、じつと一郎を見る。

一郎 「今朝、入港したのです。船長からお許しが出て、二時間だけ暇を頂いたものですから、とんで歸つたところですよ。」

つゆ子 「あら、たった二時間。つまらないわ。」

一郎 「そんなわがま、をいふもんじゃないよ。ほんたうは、歸れないほど忙しいのだ。さう、おかあさん。」

母 「何ですか。」

一郎 「私の船で、一しよに働いてゐる少年をつれて來たのですが、こゝへ通してもいゝでせうか。」

母 「いゝとも、いゝとも。すぐおつれして——」

一郎、出て行つて少年をつれて來る。少年は、行儀よくみんなに挨拶をする。

一郎 「野村君です。この春、國民學校の高等科を出て、すぐ海員募集に應じて船に乗り込んだのです。野村君の家は、こゝからずつと遠い山國です。それで、家に歸る暇もないので、うちへつれて來ました。野村君は、なか／＼勇敢な少年ですよ。」

父 「さうか。野村君、よく來てくれましたね。さあ、ゆつくりして——」

つゆ子 「ゆつくりなんか、できませんね。たった二時間ぢや。」

一郎「またそんなこと。」

母 「つゆ子、これを皆さんに——」

「といつて、紅茶を出す。つゆ子、それを運ぶ。」

母 「ちやうど今日、お砂糖の配給がありました。」

「みんな紅茶を飲む。 蟲の聲。」

二郎「あ、おいしい。」

つゆ子「いさん、こんなお砂糖だつて、みんなお船のおかげでせう。」

一郎「その通り。僅かの砂糖のやうにみえるが、大變なのだ。日本の人たちがなめるために、五千トンの船が、五隻六隻ひつきりなしに運ばなければならぬ。砂糖でさへさうだ。まして分量の多い石炭や米重油・ゴム・ボーキサイドなどを

運ぶには、まあどのくらい船がいるかわからないよ。勝つ

ためには、一にも船、二にも船、三にも船。」

二郎「四にも船、五にも船でせう。」

一郎「さうだ、さうだ。おとうさん、蟲が鳴いてゐますね。松蟲で

せう。静かですね。海の静けさとはまた別だな、野村君。」

野村は、につこりする。

父 「一郎、お前が小さい時に、よく『あれ松蟲が鳴きだした。』とか

いふ唱歌を歌つたものだが、どうだ、ひとつ思ひ出して歌つてみないか。」

一郎「ちよつとをかしいですよ、こんなに大きくなつて。」

母 「今、つゆ子が國語の本を讀んでゐましたが、やはり松蟲のこ

とが書いてありました。」

つゆ子「それを読んでお聞かせしませうか。にいさん。」

一郎「あ、読んでちやうだい。」

つゆ子「立つて、『秋』を読む。」

一郎「ありがたう。上手々々。つゆ子も、もうそんなきれいな詩を読むやうになつたのかなあ。早いものですね、おかあさん。」

母「ほんたうに早いよ。何といつても、一郎さんがもう一人前になつてゐるのですもの。」

父「野村君。どうだ、紅茶をもう一ぱい。」

野村「はい。」

一郎「おとうさん、野村君は、山國出身なのに、海にも船にもすぐなれて、見張りでも、甲板洗ひでも、それはうまいものですよ。」

父「それは感心だ。」

つゆ子「船におよひになりませんか。」

野村「初め一週間ばかり、何だかへんでしたが、すぐなれてしまひました。なれたら、揺れるのがかへつて愉快ですよ。」

二郎「さつきにいさんが、野村さんは勇敢だといつたでせう。その話をして——」

一郎「さうく、こんなことがあつた。南方のある地點へ敵前上陸をする時だつた。うまく敵の岸に近づいて、ちやうど上陸をしようといふ時、敵機がやつて来て盛んに爆撃をする。」

こちらは舟艇でどん／＼陸揚げをやる。すると、近くに落ちた爆弾の爆風に煽られて、舟艇が顛覆した。乗つてゐた兵隊さんが、海中に沈む。あの重い武装なので、容易に浮かび上れない。これを見た船員たちは、次々と海へ跳び込んで、水中にもぐつて、兵隊さんの踏臺になつて救ひ上げました。その時です、真先に海に跳び込んで行つたのが、この野村君。

父 「ほう、それは大變なお手柄だつた。」

母 「山國だとおつしやるのに、水泳もお達者なのですね。」

二郎 「えらいな。敵襲を受けた時は、どんな氣持ですか。」

野村 「あの時は、別に何とも思ひませんでした。日頃、私たちは、任

務をやり遂げるまでは死んではならないと、厳しく教へられてゐます。死ぬよりもつと重い使命があつて、それを果すまでは、もう夢中です。敵機が来ようが、爆弾が落ちようが、氣にかけてはゐられません。」

一郎 「その通りだ。死以上の覺悟を、船員たちは皆持つてゐるのだ。」

野村 「何も私がえらいとか、勇ましいとかいふのではありません。一足先に跳び込んだだけのことです、それより一郎さんは、もつともつと勇敢なことをやつてゐます。」

一郎 「何もないよ、そんなこと。」

野村 「ほら、あのガソリン樽の話。」

一郎「何だ、あんなこと。當り前ぢやないか。」

つゆ子「なあに、そのガソリン樽つて。」

野村「お話してもいゝでせう。」

一郎「話すほどのことでもないさ。」

つゆ子「聞かせてください。」

二郎「僕にも聞かせて——」

野村「かうなんです。私たちの輸送船が進んで行くと、不意に敵機の襲來を受けました。さうして、爆彈の一つが甲板に當つて、甲板に並べてあつたガソリン樽に、ぼつと火がつきました。これが、ほかの樽に燃え移つたらそれこそ大變で、全甲板はたちまち火の海になるばかりです。すると、いち早

く一郎さんが飛び出して行つて、濡れ蓑ぬれむらで、ぼう／＼燃えてゐるガソリン樽に抱きついて、海へころがしながら落してしまつたのです。おかげで船火事を免れて、みんなが救はれました。あの時の一郎さんは、まるで不動さんみたいでしたよ。」

つゆ子「一郎にいさんが不動さんだなんて、をかしいわ。」

野村「その時は、笑ひどころではありませんでした。あの早業あの勇敢さには、みんな驚きました。」

父「うむ、一郎もなか／＼よくやるね。」

二郎「にいさん、熱かつたでせう。」

一郎「火は熱いものにきまつてゐるよ、あは、。」

母 「でもまあよかつたこと。」

つゆ子 「やけどはしませんでしたか。」

一郎 「あんなことでやけどをするやうなにいさんぢやないよ。にいさんたちは一旦港を出たら油断も隙もないわけさ。濃霧がある。颯風がある。怒濤がある。おまけに、いつ敵機が空から押し寄せられるかも知れない。潜水艦がひよつこり顔を出すかも知れない。」

つゆ子 「困りますね。」

一郎 「軍艦なら、幾ら敵が来たつて平気で應戦するが、輸送船では、どうにもしやうがない。大事なものを運ぶのだから、むちやなことではできない。それで航路を變へて、あまり船の通

らない道を進んで行くことになる。するとそこには暗礁があつたり、浅瀬があつたり——」

つゆ子 「どうしても、そんなあぶないことをして通はなければならぬのですか。」

父 「今度の戦争は、初めから海の向かふでの戦だから、戦線と銃後とをしっかりと結び附ける生命の綱が、輸送船なのだ。野村君も一郎も、この生命の綱の一筋になつて、身を捧げてゐるわけなんだ。」

つゆ子 「そんなに一郎にいさんたち、えらいの。」

一郎 「これは、驚いたね。おがあさん、私たちがいつも船で歌つてゐる歌をお聞かせしませうか。」

母 「歌つてください。久しぶりね、お前の歌を聞くのは。」

一郎 「野村君、『日のもとの』の歌を一しよに歌はう。」

野一郎 「日のもとの」

をのことわれも

うたはれん、

いづくの波に

くだけ散るとも。」

二度くり返して歌ふ。二郎とつゆ子拍手。

母 「いかにも海國男子らしい、歌ですな。」

二郎 「誰が作ったの。」

一郎 「作者は不明さ。二十年ほど前から、これが海員たちの口に

のぼつて、今も盛んに歌はれてゐる。みんな集つて何かといふ時には、きつとこの歌が自然に出て来る。二郎、お前も何か歌つて聞かせないか。」

二郎 「何を歌はうかな。さう、あれを歌はう。」

といつて立ち上り、「われは海の子」の唱歌を歌ひだす。つゆ子も、聞き覚えのまま、合はせて歌ふ。一郎も野村も合唱。父と母とは、笑顔で聞く。この時、警戒警報が鳴りだす。

二郎 「あ、警報。」

つゆ子 「警戒警報。」

みんな唱歌をやめる。警報がまだ鳴つてゐる。母は電

燈の處置をする。

父 「あわてることはない。二郎もつゆ子も、服装の準備はいいね。」

つゆ子 「はい、大丈夫です。」

一郎 「確かに警戒警報だ。僕たちもかうやつてはあられない。船に歸らなくちや。野村君、出かけよう。」

つゆ子 「まだ時間がありますよ。一時間もたつておません。」

一郎 「いや、いさんたちは船を守らなくちやならない。また来る。今度はゆつくりするよ。」

つゆ子 「ほんたう。にいさん。」

一郎 「ほんたうだとも。」

父 「一郎は、一時も早く行くがいい。」

一郎 「行つてまいります。」

野村 「おじやまいたしました。」

一郎と野村は、みんなに挨拶をする。

母 「では、氣をつけてね。お元氣で。」

二郎 「野村さん、またいらつしやい。」

野村 「ありがたう。」

母 「何もおかまひしませんでしたね。」

野村 「いゝえ、今夜は愉快でした。」

みんな急ぎめに立ち上り、玄關の方へ出て行く。戸外で

「警戒警報發令。」——と呼ぶ聲。

九 ハワイ海戦

一

日本・ハワイ間約四千海里——地球の周囲の約五分の一に當るこの長距離を突破しつゝ、わが航空母艦は一路東へ進んだ。あと数日てハワイ附近に到達しようといふ頃、低氣壓が來襲した。ハワイ附近は、ふだんでも長濤の難所であるが、この低氣壓のために、艦の動搖は一層激しかった。

「せつかく目的地へ到達しても、艦載機が飛べなくなるのではあるまいか。」

けれども、天佑はいつも人事の限りを盡くす皇軍の上にある。

こんな惡天候を冒して、よもや日本海軍が襲撃するなどは、夢にもアメリカが想像しなかつたのである。

ハワイ攻撃部隊は、途中なんらアメリカの監視に妨げられることがなかつた。

旗艦の檣頭しやうとうに、四色の旗が掲げられた。三十七年前日本海々戦に、皇國の興廢を荷なつたあの信號旗である。

ハワイ攻撃部隊全員は、甲板に整列してこの旗を仰いだ。「各員粉骨碎身その任務を完了せよ。」

航空部隊指揮官は、嚴然として訓示した。

その夜、ラジオのスイッチを入れると、ホノルル放送局の電波が傳はつて來る。浮きくした調子の音楽、掛合ひ萬歳のやう

な劇場の中継放送には、観客の笑ひ聲さへ混つてゐる。あたたかも土曜日の夜が、週末の享樂にふけて行くところであつた。

二

真珠灣は、まだ眠りから覺めきつてゐない。

亂雲がすい／＼飛んで行き、地上の高い建物には、拭ひきれない朝もやがまつはりついてゐる。

この乳白色の朝景色を切つて、さつと天空からかけ降りたわが海鷲の一隊があつた。フォード島の北岸の岩壁に足を掛けて、戦艦群の檣ほししらに一飛びで飛ぶやうなかつかうで——事實鳥であつたら、その通りするに違ひないが——途中海面すれ／＼に降りて、しつかと抱いて來た魚雷を發射すると、早くも眼前に迫

る檣を巧みに交して、ついと腹を見せながら大空へかけ上つた。雷撃機隊の魚雷攻撃が始つたのである。

ど、ど、どーん。一瞬にして響く一大轟音は、遙かオアフ島の山並みまでゆすつて、靜寂はたちまち打ち破られた。

むく／＼／＼と、巨大な海魔の手のやうに、主力艦の舷側から眞白な水柱が立ち昇る。

五十メートル、百メートル、二百、三百——

その中途あたりを、燕のやうに腹を返して、雷撃機は次々と大空へかけのぼつて行く。

眞珠灣は狭くて浅く、その上標高千メートルの山嶺が、けはしく迫つてゐる。雷撃機隊に取つては、決して安樂な戰場ではな



い。編隊行動が困難なので、単機になつた。一機が魚雷の發射を行なふ。もの凄い水柱が天に冲する。それが静まると、また次の一機が襲ひかかる。水柱の中へ突つ込んだのでは、機體もろとも噴き上げられてしまふ。魚雷を胴腹に抱いて、大空で順番を待つ雷撃機は、或るものは海面すれすれに、或るものは敵の胴腹二三百メートルの真横まで接近して、こゝぞとばかり魚雷をたゞき込む。

白い雷跡を引いた魚雷は、眞一文字に敵艦のどてつ腹へ突進して行く。

一方、戦闘機隊は大空を悠々と飛んでゐる。

「敵機は来ないか。」

今こそ、わが戦闘機隊の腕前をアメリカに思ひ知らせるのだ。はる／＼四千海里の波濤を越えて、敵を求めてハワイ軍港の眞上まで推参した戦闘機隊である。

「見参、見参。」

われに挑戦する敵機があれば、一機も残さず落してくれよう。オアフ島には、幾つかの海軍航空部隊と陸軍航空部隊があつて、その全機を合はせたら数百機にのぼるであらう。彈丸の續く限り、撃ちまくり斬りまくり、それでも敵機がしつこく抵抗すれば敵と刺し違へて、日本戦闘機隊の最期をハワイのアメリカ人らに見せてくれるぞと、必殺必勝の戦闘機は、怒れる鷲の如く爪を張り、目を八方にすゑて、アメリカ飛行機をさがし求めた。

けれども、わが方に挑戦するため舞ひ上つて来るのは一機もなく、敵の對空砲火さへ一發も轟かない。
 ハワイ軍港は、まだ迂闊うくわつにも眠つてゐる。
 「われ、奇襲に成功せり。」

指揮官機から、赫々たる第一報が航空母艦へ飛んだ。

三

敵飛行場の格納庫や、飛行機も、同じやうにわが猛爆を受けて、紅蓮ぐれんの焰を噴き上げてゐた。急降下爆撃機隊は、先づ、敵の航空部隊を襲つたのである。

フオード島の海軍航空基地は、陸上班と水上班があり、水上班基地には、なぎさにずらりと大型飛行艇が並んでゐる。沖合ひ



のわが艦隊に、もしも空から仇なすものがあるとすれば、それは航績距離を持つこの飛行艇隊である。

わが急降下爆撃機隊は、隼はやぶさのやうにその上へ舞ひ降りた。ガソリンを十分積み込んで、いつでも飛び立ち得る飛行艇は、必中の爆弾を受け、たちまちもくくと黒煙を上げて燃え始めた。

ガソリンから上る黒煙は、さながら怪獣の巨大な舌のやうに、軍港の朝ぼらけをなめまはした。

戦闘機隊も、挑戦する敵機なしと見てとるや、たちまち地上の敵機の翼に止らんばかりの低空へ敢然と舞ひ降りて、地上の敵機を、一機々々、機銃弾で突き刺した。大空へ一機ものがすまいと思ひきつて低空へ降りた海鷲の中には、敵の電線を引つ掛けて、そのまま、母艦へ歸つたものもある。

太平洋艦隊主力艦の舷側はちぎれて空中に飛散し、敵機は地上でもろくも炎上し、標的艦ユタは胴腹をえぐられて重油を海面に噴き出し、重巡洋艦は爆弾を受けて火炎を上げ始める頃や、つと敵の砲火は、わが航空部隊をねらつて炸裂^{さくれつ}した。

四

低気圧のなごりは、標高千メートルのオアフ島山嶺にまだ残つてゐた。

吹きおろす悪気流に、わが荒鷲部隊の機體は、ぐらぐらと動揺する。

いよいよ、大型爆弾を抱いた爆撃機隊の攻撃の時であるが、水平爆撃の照準がつかかねるので、悠々と旋回をやり直してゐる。高角砲弾はだんぐり烈しくなつて、上空は弾雲に鎖されたが、一念こもつた爆弾を何でむだに投下されようか。

従容として投下した第一弾は、ものの見事に敵艦の真中に炸裂した。

敵の戦艦一隻はこの時早くも艦體を鮮やかに切断され、大爆発を起して沈没した。空からの猛撃と、更に水中にひそんでゐて攻撃した、特別攻撃隊のあげた戦果であつた。

二隻づつ並んだ戦艦は、またどない絶好の標的である。一隊が片方をねらへば、他の一隊は残りの戦艦をねらふ。雷撃機が襲ひかゝつた後から、急降下爆撃機が殺到し、更に大型爆弾を抱いた爆撃機が続く。撃沈するまでは、止めることのない連続攻撃である。

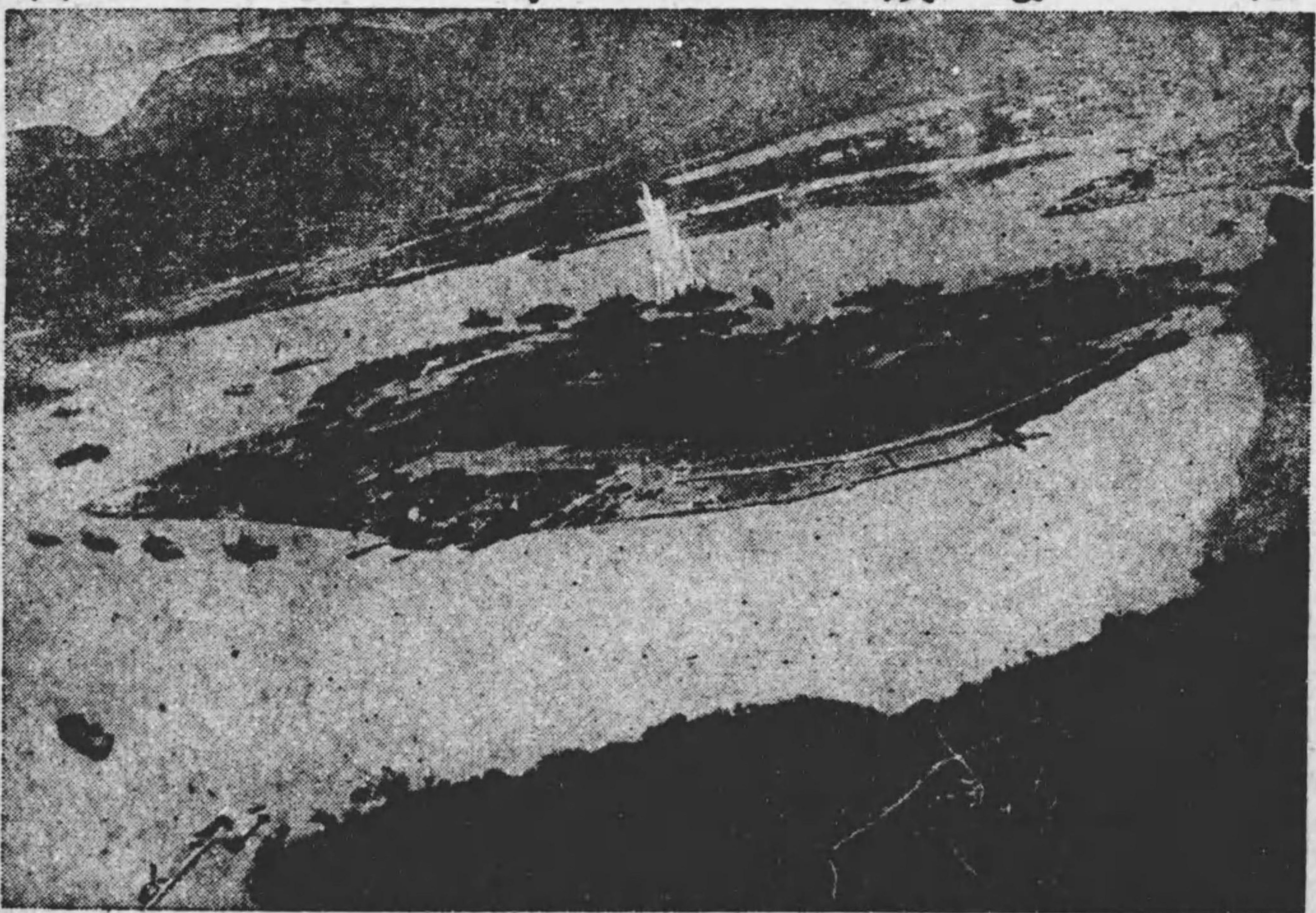
必殺を期する雷撃機の魚雷発射は、だんく間近まで迫つて行なはれる。並んだ二艦を、一つの魚雷で田楽刺しにするつもりか、力のこもつた魚雷が雷跡をあげて肉迫する一方、機首を立て

て直さうとする雷撃機は、そこをねらはれて真向から敵弾をかぶる。

たちまち、機體は一塊の火焰となる。すると、火の玉となつた雷撃機は、再び機首を敵艦に向け、そのまま、魚雷の跡を追つて真一文字。敵の甲板に火柱が立つのと、舷側から水煙が巻き起るのと同時である。

この頃から、わが方の損害も甚だしさを加へて来る。

大空で悠々敵をたふす順番を待



つてゐる爆撃機隊は、先づ司令機が左胴體に大きな穴をあけられた。續く編隊機の中にも、ガソリンを噴き出してゐるのがあつた。爆撃が終つたら、敵艦目がけて自爆するつもりらしいこの爆撃機に、司令機が、

「状況報せよ。」

と信號すると、

「補助タンクのみ。」

と、平然と答へる。「補助タンクだから、破損しても心配はない。」と、司令機に答へたのである。

戦闘機の中には、機銃弾を最後の一發まで撃ちまくつた上、残つてゐる敵の格納庫へ機體もろとも體當りをして、自爆した勇

士がある。母艦へ歸らうと思へば歸ることのできる状態にありながら、怨敵二十年、今ハワイの敵を眼前にして、醜の御楯となる好機を得たと思へば、撃つて撃つて撃ちまくり、それでも氣がすまず、遂に身體もろとも、命を護國の礎として捧げ盡くしたのである。

五

第一次攻撃部隊に引き續き、第二次攻撃部隊が母艦から飛び立つて、残つた敵艦・敵軍事施設を痛爆した。特別攻撃隊のたゞきつけた必殺の魚雷とあひまつて、ハワイに在泊してゐたアメリカ太平洋艦隊主力は、一朝にして潰滅してしまつた。

十 亡きあと

母上へ

亡きあとの御歎きさこそと推しはかり、恐れ多く候へども、武士の母たる御方にて候へば、あまりに御歎きなさるまじく候。先立ちし友だちのとりわけ潔かりしはうらやましく、熱にをかされ氣を失ひ、いひがひなき死はくちをしくこそ覚え候へ。十五の歳の大病にて死ぬべきものの、仕合はせよく二十年来生きのびて、妻さへ子さへある身となり、思ひ遺すこともなく候へば、よくよく思し召しわけられ候うて、臆病なる事してかして人に後指さるゝよりはと、御あきらめ下さるべく候。

なほ、幾久しく御すこやかに御暮しなされ、朝夕後世の御願ひ、肝要と存じ奉り候。

六月二十三日

良藏

福原母上様

わが子へ

過ぎし暇乞ひの折から、返すくも母ありと思ふべからずと申し聞け候に、また立ち歸りわれを訪ひ候事、最も孝行に似たる不孝なり。とかく老いたる母が世にながらへてある故に、かゝる不覺を見るなれば、先づ自ら先に死して義を教へ、武士の恥なからんことを示すなり。これも子を思ふの道なり。そなたも年五十に餘りぬれば、中老なり。申すには及ばず候へども、町人

百姓は義不義によらず命を大切に、父母をはごくむはこれ道なり。武士の家に生まれては義と恩には一命を捨てて報い奉るこそ人にて候へ。いよく心を固め、亡君の御ために命を捨て給はるべく候。かしく。(原惣右衛門の母)

十一 春の水

春の水山なき國を流れけり

蕪村

うぐひすや家内揃うて飯時分

菜の花や晝ひとしきり海の音

春風や堤長うして家遠し

牡丹散つてうちかさなりぬ二三片

さみだれや大河を前に家二軒

石工の鑿冷したる清水かな

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

月天心貧しき町を通りけり

西吹けば東にたまる落葉かな

磯千鳥あしをぬらして遊びけり

宿かせと刀投げ出す吹雪かな

十二 單語のいろく

一. 用言

濃い 青空には、春の 國から 生まれて 来たかと
 思はれる 白雲が、山の 懷ふとこから 顔を 出す。
 やはらかな 日ざしが、窓 一ぱいに 降りそ、ぐ。
 縁先の 雪が、かすかな 音を 立てて 崩れる。
 風は まだ うら寒い。けれども、家々の 窓も 障子
 も、一せいに あけはなされて、どこからか、カナリヤ
 の さへづりが 朗かに 聞えて 来る。

○右の文で、傍線を引いた單語は、自立語か附屬語か、調べてみよ。

○それらに活用があるかないか、調べてみよ。

自立語で、活用のある單語を用言といふ。

○傍線を附けた單語を、次の例にならつて文の終りに用ひ、いひ切りの形にしてみよ。

今日は 暖かい。

明日 行く。

ほんたうに きれいだ。

○右のほか「暑い」「寒い」「書く」「読む」「話す」「りつばだ」「きれいだ」「うれしい」「作る」「朗かだ」「登る」「苦しい」等、できるだけたくさん、用言を取りあげて、そのいひ切りになる時の音を比べてみよ。これでどういふことが發見されるか。

(一) 飛行機が 飛ぶ。

鳥が 鳴く。

花が 咲く。

これらは、「ウ」の段の音でいひ切りになつてゐる。

(二) 飛行機は 早い。

この 花は 赤い。

山の中は 涼しい。

これらは、「イ」の音でいひ切りになつてゐる。

(三) 春は 暖かだ。

海が おだやかだ。

花が きれいだ。

これらは、「ダ」の音でいひ切りになつてゐる。

(一)のやうなものが動詞であり、(二)のやうなものが形容詞であり、(三)のやうなものが形容動詞である。つまり、用言はこの三つに分けることができる。

二 體言

また、夜が 明けきらない うちに わが 偵察機隊

は、敵を 求めて 母艦を 飛び立つた。

私は、「今日こそは 敵を とらへて くれ。 さうして、

無事に 歸つて 来て くれ」と。海上に 一機 二機

と 消えて 行く 機影を じつと 見送りながら、

心の中で 祈つた。

朝食後、「配置に 就け」の 號令が 全艦に 響き渡つた。用意は 出來た。 さあ、 來い。 唯 偵察機からの 吉報を 待つばかりだ。

○右の文で傍線を引いた單語は、自立語か附屬語か。
○これらに活用があるか。

これらの單語のうち、夜「偵察機隊」「私」「號令」「用意等」は、いづれも「は」「も」を伴なつて主語になつてゐる。このやうに、附屬語「が」「は」「も」を伴なつて主語となる單語を、體言といふ。

「敵」「今日」「海上」「一機」等は、この文の場合では「が」「は」「も」を伴なつてゐないけれども、例へば次のやうに、

敵は たちまち 敗走した。

今日も よい 天氣だ。海上は 静かだ。

一機が 體當りを 敢行した。

となつて、主語としての文節を作ることができる。だから、これらも體言である。

體言は、又、名詞といふ。名詞には、次のやうにいろいろなものがある。

- (一) 机 雀 梅 石炭 家 機械
- (二) 心 勇氣 衛生 時間 今日
- (三) 太平洋 富士山・信濃川 琵琶湖
- (四) 東京都 大阪府 長崎縣
- (五) 楠木正成 吉田松陰 東郷元帥

- (六) 一つ 二 三人 四羽 第五 六つめ 七時 幾つ
- (七) 私 あなた これ あつち どこ

これらのうち(一)(二)は事物の名を表すもの(三)(四)(五)は地名や人名を表すもの(六)は数を表すか、数による順序を表すものである。

これに對して(七)は事物の名を表すものでもなければ、地名人名を表すものでもない。武田といふ人でも、山本といふ人でも、みんな自分のことをさして「私」といふことができるし、又、相手が武田といふ人でも、山本といふ人でも、それをさして「あなた」といふことができる。

名詞の中で(三)(四)(五)のやうに、地名・人名を表すものを固有名詞といふことがあり、(六)のやうに、數に關係するものを數詞(七)のや

うに、事物の名をいはないで、直接事物をさして「いふもの」を代名詞といふことがある。

代名詞には、「私」「あなた」となたのやうに、人をさして用ひるものと、「これ」「そこ」とちらのやうに、事物・場所・方角をさして「いふもの」がある。

○人に關する代名詞は、目上の人に用ひるものと、友人などに用ひるものとで、違ふことが多い。どんなに違ふか、調べてみよう。

三 副詞その他

九十三ページにある例文のうち、「また」「わが」「さうして」「じつと」「さあ」「唯」等も、活用のない自立語であるが、これらは普通主語の文節になることのできないものである。これが「體言」と違ふ點

である。

そのうちで、また「わが」じつと「唯はそれだけで文節となつて下に来る文節にかゝる修飾語になつてゐる。即ち「じつとは」見送りながら「にかゝつて」見送るといふ用言を修飾し、「わがは」偵察機隊は「にかゝつて」偵察機隊といふ體言を修飾してゐる。即ち用言を修飾するものと、體言を修飾するものがあることがわかる。前者を副詞といひ、後者を連體詞といふ。

○前例の「まだ」唯は何を修飾してゐるか。
網の 網を しつかり つなげ。
世間は すつかり 失望した。
今日は ずゐぶん 暑い。

右の「しつかり」「すつかり」「ずゐぶん」は副詞である。このやうに、修飾する副詞と修飾される用言とが、すぐ續いてゐることもあるが、前例の「唯」のやうに、用言との間に他の語がはさまつてゐる場合が少くない。

もつと ゆつくり 歩け。
よほど はつきり 見える。

右の「ゆつくり」「はつきり」は「歩け」「見える」にかゝる副詞であるが、「もつと」「よほど」は、更に「ゆつくり」「はつきり」を修飾する副詞である。

副詞は、用言の外に、副詞をも修飾するのである。

○次の空白に適當に書き入れよ。

- (一) 決して でき□□。
- (二) とても 書け□□。
- (三) 多分 だめて□□。
- (四) さぞ お困りて ございま□□。
- (五) もし 行けなかつ□□、許して くれたまへ。
- (六) たとへ 失敗しよう□□、やり抜いて みせる。

このやうに、副詞には、下に來る言葉に特別のいひ方をさせるものがある。

○次の文について、今「明日」「二つ」は、副詞か體言かを考へよ。

今 来た、ところす。

明日 東京へ 行きます。

みかんを 二つ ください。

○體言と副詞とは、どうして見わけるか。

ある 夜の ことて あつた。

あらゆる ほめことばが、かれらに 浴びせられた。

大きな 力で、ぐんぐんと、人を 引っぱつて 行かれる。

小さな すみれが 咲いて みた。

右の「ある」「あらゆる」「大きな」「小さな」は、體言を修飾してゐるか、連體詞である。それぐ、どの體言を修飾してゐるか、考へてみよ。

もう一度九十三ページの例文を見よう。そこにある「さうして」「と」「さあ」は、主語でもなく、述語でもなく、又、修飾語でもない。

○文の成り立ちの上から、主語でも、述語でも、修飾語でもないものは何か。

「さうして」「さあは、いづれも獨立語として用ひられるものであるが、同じ獨立語でも、さうして」の方は下へ續く意味が強く、「さあは殆どそこで意味が切れる。

明日は 雨でせうか。

さあ。

のやうに、「さあはそれだけで一つの文にさへなり得る。「さうして」のやうなのを接續詞といひ、「さあ」のやうなのを感動詞といふ。○左の文中、傍線を引いた部分は、接續詞か感動詞か、考へてみよう。
道は かなり 遠い。 しかし、 車で 行けば 時間はか、

らない。

山 又 山を 分けて 行つた。

京都 及び 奈良は、 舊都て ある。

あ、 さうだつた。

おい、 網を 揚げらんだ。

もし、 田中さんですか。

はい、 わかりました。

いや、 そんな ことは 知りません。

四 助動詞と助詞

世の中に 容れられないと いふ ことは、 何でも ありません。 今の 亂れた 世に 容れられなければこそ、 ほ

んたうに 先生の 大きい ことが わかります。

○右の文で、傍線を引いた部分は、自立語か、附屬語か。

○それらに活用があるかないか、調べてみよ。

附屬語で活用のあるものを助動詞といふ。

生まれた 家を 出て 行くのです。 どうぞ 私に 代つ
て、 おとうさんや おかあさんを、 だいに して あげ
て くださいね。 おかあさんは、 さう お丈夫では ない
んですから。

○右の文で、傍線を引いた部分は、自立語か、附屬語か。

○これらに活用があるか。

附屬語で活用のないものを助詞といふ。

十三 雪の山

一

一條天皇の御時のこと、或る年の十二月十日過ぎに、京都では
かなり雪が降りました。

お后はその頃、御休養のため宮中からおさがりになつて、或る
御殿にいらつしやいましたが、珍しく雪が降つたので、その日、六
七人の官女たちと、お庭の雪を眺めていらつしやいました。 清
少納言も、お側近く仕へてみました。

廣いお庭では、大勢の男たちが、雪をかき集めては、それを一箇
所に積み上げてみます。 見る／＼それが高くなつて、見上げる

ほどの雪の山になりました。

お后は、官女たちに、

「この雪の山は、いつまで残つてゐるだらうね」と仰せになりました。

皆は、ちよつと顔を見合はせましたが、

「十二三日ぐらゐはございませうか。」

と、一人の官女が申しますと、

「そのくらゐと、私も思ひます。」

「私も、さうと思ひます。」

と、次々にお答へ申し上げました。

お后は、この時まで何もいはないでたまつてゐる清少納言に、

「そなたはどう思ふ。」

と、お尋ねになりました。

「正月の十五日まではあらうかと存じます。」

これが、清少納言のお答へ申し上げた言葉でした。すると、一座が少し動揺し始めました。

「そんなに長くあるでせうか。」

「幾ら長くても、今年のうちにはきつと消えるでせう。」

「さうですとも。この雪が大晦日おほみそかまであらうなどは、とても考へられません。」

官女たちは、口々にいひました。さういはれてみると、少しいひ方が大きかつたかしら。」と、心に思はれなくてもありませんでし

だが、負けぎらひの清少納言は、官女たちに、

「私は、どうしても正月の十五日まであると思ひます。」
といつて動きません。かういふ時、清少納言の態度は、いつもは
つきりしてゐました。

二

十二月の二十日近くなつても、雪の山は、皆が思つたほど小さ
くなりませんでした。少しばかり、せいが低くなつたくらゐの
ことです。

大晦日近くなると、だいぶ小さくはなりましたが、それでも雪
の山は、とうとう年の瀬を無事に越してしまひました。

三

元日に雪が降りました。よい具合だと、清少納言は思ひまし
た。すると、お后の仰せて、

「今日降つた雪だけは取り除くやうに。」

どのお言葉です。男たちが、雪かきで用捨なく新しい雪を取り
捨ててしまひました。

四

正月の三日に、お后は、宮中へお歸りになることになりました。
雪の山は、所々黒くなつて、みすばらしい姿をしてゐます。

「これが十五日まであるものですか。」
「七日までももたないでせう。」

など、官女たちがお互にいつてゐます。清少納言は、同じことな

ら、十五日までこゝにゐて見届けたいものだと思ひましたが、自分もお后のお供をしてまゐらなければなりません。それで、お庭師を呼んで、

「この雪を消さないやうに、人が踏み散らしたりしないやうに、嚴重に番をしてください。十五日まで雪が残つてゐたら、きつとごはうびをあげますから。」

と頼みました。ごはうびと聞いて、お庭師はにこ〜しながら、「よろしうございます。きつと氣をつけます。」と答へました。

五

七日に、清少納言は、正月のお暇を頂いて、宮中から自分の家へ

さがりました。

十日には、まだ雪が五六尺四方は残つてゐます。といふ知らせです。では、もう大丈夫だと思つてゐる矢先、十三日の夜、あいにく大雨が降りだしました。清少納言は、その夜一夜眠られませんでした。夜が明けけるのを待ちかねて尋ねにやりますと、

「ぎぶとんほど残つてゐます。明日までは大丈夫もちます。」といふお庭師の返事でした。

六

いよく十五日の朝です。

清少納言は、まだ暗いうちに、使ひの者に大きなお盆を持たせて、

「これに、雪の白い所だけ山のやうに盛つて、持つて来ておくれ」といひ含めました。さうして、その間に、歌を作つて紙に認め、雪に添へてお后のお目にかけてようと、清少納言は使ひの歸るのを首を長くして待つてみました。

使ひの者が歸つて來ました。

「雪はすつかりなくなつてみました。」

これが使ひの言葉です。

でも、昨日あんなに残つてゐて、大丈夫のはずだつたのに。」

「昨日夕方までは、ちやんどありました。が、今朝はございませぬ。ごはうびが頂けないといつて、お庭師が残念がつてをりました。」

もう、歌どころではありません。そこへ、お后からのお使ひがありました。

「雪は、今日まで残つてゐたか。」

といふお尋ねです。清少納言は、

「昨日の夕方までは、確かにございました。昨夜、誰かがいたづらをしたとみえまして、今朝は少しも無いさうでございます。残念ながら、かう御返事申し上げるほかは、ありませんでした。」

七

正月の二十日に、清少納言は宮中へ参りました。お后にお目通りして、

「せつかく使ひをやりましたのに、雪はすつかり無くなつてを

りましたと、その使ひがお盆を帽子のやうにかぶつて歸つてまゐりました時、私はほんたうに残念でございました。お盆に白い雪を盛つて、つたなくとも私の歌を添へまして、献上いたしたいと存じてをりましたのに。

と申し上げますと、お后はお笑ひになりました。官女たちも皆笑ひました。

「それほど、そなたが思ひ込んでゐたのに、實は十四日の夜、人をやつて雪を取り捨てさせたのです。あまり勝ち過ぎて、人に恨まれてはかはいさうだから。」

と、お后が仰せになりました。清少納言ははつとしました。お言葉はまだ静かに續きます。

「しかし、雪はまだたくさん残つてゐたといふから、何といつてもそなたがりつばに勝つたのです。みかどが、この事を聞き召して、よくもいひ當てたものだ、と、殿上人たちに仰せになつたさうです。さあ、そなたの、その歌といふのが聞きたいものです。」

官女たちもいひました。

「是非、その歌をお聞かせください。」

たつた今の今まで残念とばかり思ひつめてゐた清少納言の心は、すつかり解けて明かくなりしました。そればかりか、自分のやうな者を、これほどにまで思つて頂けるかと思ふともつたいなくて、泣きたいやうな氣にさへなりました。

「今さら、どうして私のつたない歌をお目にかけることができませう。どうぞ、それだけはお許しくたさいませ。」
かう申し上げながらも、清少納言は、ありがたいと思ふ心で胸が一ぱいになりました。

十四 山ざくら花

賀茂真淵

うらく／＼とのどけき春の心よりにほひ出でたる山ざくら花

本居宣長

さし出づるこの日の本の光よりこまもろこしも春を

知るらむ

小澤盛庵

父母の旅なるわれを思ふらむ待つらむさまのおもかげに見ゆ

香川景樹

富士のねを木の間木の間にかへりみて松のかげふむ
浮島が原

加納諸平

壁立てるいはほとほりて天地にとゞろきわたる瀧の音かな

井手曙覽

蟻と蟻うなづきあひて何かことありげにはしる西へ
東へ

大隈言道

かささせるさゝぬも過ぐる橋の上の夕暮近き雨のは
れがた

野村望東

紅のやまと錦もいろくの絲まじへてぞあやは織り
ける

大田垣蓮月

音もせずふるとも見えぬ朝じめり枝おもげなる青柳
のいと

高崎正風

國といふ國をめぐりて日の本の人と生まれし幸は知
りにき

十五 大君のへに

太平記

松の下露

さるほどに、類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、
主上を始めまゐらせて、宮々卿相雲客、皆徒はだしなる體にて、い
づくをさすともなく、足に任せて落ち行き給ふ。この人々、初め
一二町がほどこそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供を申され
たりけれ。雨風烈しく道暗うして、敵のときの聲こゝかしこに

聞えければ次第に別々になつて、後には唯藤房季房二人よりほかは、主上の御手を引きまゐらする人もなし。かたじけなくも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そのことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。

いかにもして、夜のうちに赤坂の城へと御心ばかりを盡くされけれども、かりにも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ちとゞまり、晝は道の傍らなる青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草を御しとねとし、夜は、人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、御袖をほしあへず。とかうして夜晝三日に、山城の多賀の郡なる有王山の麓まで、落ちさせ給ひてけり。藤房季房も、三日まで口中の食を断ちけれ

ば、足たゆみ身疲れて、今はいかなる目にあふとも、逃げぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟もろともに、うつゝの夢に卧し給ふ。

梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと思し召して、木陰に立ち寄り、せ給ひたれば、下露のはらくと御袖にかゝりけるを、主上御覽せられて、

さしてゆく笠置の山を出てしより、天が下にはかくれがもなし。藤房の御涙を押さへて、

いかにせむたのむかげとて立ちよれば、なほ袖ぬらす松の下露

院の莊しやう

その頃備前の國に、兒島備後三郎高德といふ者あり。主上、隱岐の國へ遷らせ給ふと聞きて、二心なき一族どもを集めて評定しけるは、

「志士仁人は、生を求めて以つて仁を害することなし、身を殺して以つて仁を爲すことありといへり。義を見てせざるは、勇なきなり。いざや、臨幸の路次にまゐりあひ、君を迎へ奉りて大軍を起したとひかばねを戰場にさらすとも、名を子孫に傳へん。」

と申しければ、心ある一族ども、皆この議に同ず。さらば、路次の難所に相待ちて、その隙をうかぶべしとて、備前と播磨との境なる船坂山に隠れ伏し、今やくとぞ待ちたりける。

臨幸あまりに遅かりければ、人を走らせてこれを見するに、警固の武士、山陽道を経ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり、遷幸なし奉りける間、高德が支度相違してけり。さらば、美作の杉坂こそ究竟の深山なれ、こゝにて待ち奉らんとて、三石の山よりすぢかひに、道もなき山の雲をしのぎて、杉坂に着きたりければ、主上は、や院の莊へ入らせ給ひぬと申す。力なく、これより散りくになりけるが、せめてもこの所存を、上聞に達せばやと思ひ、微服潛行して時をうかぶひけれども、然るべき隙もなかりければ、君の御座ある御宿の庭に、大きな櫻の木がありけるをおし削りて、大文字に一句の詩をぞ書き附けたりける。

天勾踐を空しうする莫れ。

時、范蠡無きにしも非ず。

警固の武士ども、朝あしたにこれを見つけて、何事をいかなる者が書きたるやらんとて讀みかねて、すなはち上聞に達してけり。主上は、やがて詩の心を御覺りありて、龍顏殊に御快く笑ませ給ひぬ。

熊野落ち

大塔宮護良親王は、笠置の城の安否を聞し召されんために、暫く南都の般若寺はんにやに忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上遷らせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を踏むおそれ御身の上うへに迫りて、天地廣しといへども、御身を隠さるべき所なし。日月

明らかかなりといへども、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に卧すうづらの床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻にたずみて、人をとがむる里の犬に御心をなやまされ、いつくとして御心安かるべき所なかりければ、かくても、しばしはと思し召されけるところに、一條院の好専かうせんといふ者、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。

折ふし、宮に付き奉りたる人ひとりもなかりければ、ひと防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく、兵つはもの既に寺内に打ち入りたれば、まぎれて御出であるべき方もなし。さらばよし、自害せんと思し召して、既におし肌脱がせ給ひたりけるが、事かなはざらん期に臨んで、腹を切らんこといと易かる

べし、もしやと、隠れて見ばやと思し召し返して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけておきたる大般若の唐櫃からびつ三つあり。二つの櫃は未だ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ば過ぎ取り出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隱形おんぎやうの呪じゆを御心の中に唱へてぞおはしける。もし搜し出されば、やがて突き立てんと思し召して、氷の如くなる刀を抜いて、御腹に差し當てて、兵ここにこそといはんずる一言を待たせ給ひける御心のうち、推し量るもなほ淺かるべし。

さるほどに、兵、佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上まで、残る所なく搜しけるが、あまりに求めかねて、

「これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。とて、蓋したる櫃二つを開いて御經を取り出し、底をひるがへして見けれども、おはせず。蓋あきたる櫃は見るまでもなしとて、兵皆寺中を出て去りぬ。

宮は、不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃のうちにおはしけるが、もしまた兵立ち歸り、詳しく搜すこともやあらんずらんと御思案あつて、やがてさきに兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。案の如く、兵ども、また佛殿に立ち歸り、

「さきに蓋のあきたるを見ざりつるが、おぼつかなし。」とて、御經を皆打ち移して見けるが、からくと打ち笑ひて、

「大般若の櫃の中をよくく捜したれば、大塔宮はいらせ給は
て、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。」

とたはむれければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。

かくては、南都邊の御隠れ家もかなひがたければ、すなはち般
若寺を御出でありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の
衆には、光林房玄尊、赤松律師則祐、木寺相模岡本三河房、武藏房村
上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、かれこれ以上九人なり。
宮を始め奉りて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半
ばにせめ、そのうちに年長せるを先達に作りて、田舎山伏の熊野
参詣する體にぞ見せたりける。

この君もとより、龍樓鳳闕の内に、人とならせ給ひて、華軒香車

の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めてかな
はせ給はじと、御供の人々、かねては心苦しく思ひけるに、案に相
違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる踏皮脚
巾、草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、
宿々の御勤め、息らせ給はざりければ、路次に行き會ひける道者
も、勤修を積める先達も、見とがむることなかりけり。

由良の港を見渡せば、沖漕ぐ船の梶をたえ、浦の濱ゆふ幾重と
も、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山、渺々と、藤代の松にかゝ
れる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月にみがける玉津島光も今
はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習ひなるに、雨を含め
る孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目

の王子に着き給ふ。

吉野の花

さるほどに、からめ手の兵思ひも寄らず勝手の明神の前より押し寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つてかゝりける間大塔宮、今は遁れぬところなりと思し召しきつて、赤地の錦の直垂ひたれに、緋緘ひきの鎧よろいを召させられ、龍頭の兜かぶとの緒をしめ、三尺五寸の小長こなが刀なたを脇にさしはさみ、劣らぬ兵二十餘人前後左右に立ち、敵の群がつて控へたる中へ走りかゝり、東西を拂ひ、南北へ追ひ廻し、黒煙を立てて切つて廻らせ給ふに、寄せ手大勢なりといへども、僅かの小勢に切り立てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へさつと引く。

敵引けば、宮は藏王堂の大庭に並み居させ給ひて、大幕打ち揚げて、最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つところの矢七筋御頬先、二の御腕二箇所突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の如し。然れども、立ちたる矢をも抜き給はず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大杯を三度傾けさせ給ふ。

村上彦四郎義光よしみつ鎧よろいに立つところの矢十六筋、枯野に残る冬草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前にまゐつて申しけるは、

敵既に勢に乗じて、御方の氣疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てんこと、かなはじと覚え候。今は、一方より打ち破つて、一先づ落ちて御覽あるべしと存じ候。但し、後に残り留つて戦

ふ兵なくば、宮の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵いづくまでも續きて追つかけまゐらせんと覺え候へば、恐れあることにて候へども、召されて候錦の御直垂と、御物の具とを賜ひて、御名を冒して敵をあざむき、御命に代りまゐらせ候はん。

と申しければ、宮、
「いかでか、さることあるべき。死なば一所にてこそ、ともかくもならぬ。」

と仰せられけるを、義光、言葉を荒らかにして、
「かゝるあさましき御事や候。はや、その御物の具を脱がせ給ひ候へ。」

と申して、御鎧の上帯を解き奉れば、宮げにもとや思し召しけん、
御物の具直垂まで脱ぎかへさせ給ひて、
「われもし生きてならば、汝が後生を弔ふべし。共に敵の手にか

からば、冥途までも同じちまたに伴なふべし。」
と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を、南に向かつて落ちさせ給ふ。

義光は、二の木戸の高櫓に登り、遙かに見送り奉りて、宮の御後影のかすかに隔たらせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狭間の板を切り落し、身をあらはにして、大音聲を揚げて名のりけるは、

「天照大神の御子孫、神武天皇より九十六代の帝、後醍醐天皇第三の皇子、兵部卿親王護良、逆臣のために亡され、恨みを泉下に、

報ぜんために、たゞ今自害する有様見おきて、汝らが武運たち
まちに盡きて、腹を切らんずる時の手本にせよ。

といふまゝに、鎧を脱いで櫓より下へ投げ落とし、錦の直垂の袴ば
かりに、二つ小袖をおし肌脱いで、白く清げなる肌はらわたに刀をつき立
て、左の脇より右、腹一文字にかき切つて、腸つかんで櫓の板に投
げつけ、太刀を口にくはへて、うつぶしになつてぞ伏したりける。
大手からめ手の寄せ手、これを見て、

「ずはや、大塔宮の御自害あるは。われ先に御首を賜はらん。」
とて、四方の圍みを解いて一所に集る。その間に、宮は引き違へ
て、天川へぞ落ちさせ給ふ。

義光が子息兵衛藏人義隆は、父が自害しつる時、共に腹を切ら

んと、二の木戸の櫓下まで馳せ來たりけるを、父大きに諫めて、
「父子の義はさることなれども、暫く生きて宮の御先途を見は
てまゐらせよ。」
と訓へを残しければ、力なく暫く命を延べて、宮の御供にぞ候ひ
ける。

船上のみゆき

夜も既に明けければ、船人ともづなを解いて順風に帆を揚げ、
港の外に漕ぎ出す。船頭、主上の御有様を見奉りて、たゞ人にて
はわたらせ給はじとや思ひけん、屋形の前に畏まつて申しける
は、

「かやうの時、御船を仕つて候こそ、われらが生涯の面目にて候

へ。いづくの浦へ寄せよとも御諚ごさしに従ひて、御船の梶をば仕り候べし。

と申して、まことに他事もなげなる氣色なり。六條の少將忠顯あきひら朝臣あそんこれを聞き給ひて、隠してはなかく悪しかりなれと思はれければ、この船頭近く呼び寄せて、

「屋形の中に御座あるこそ、日本國の主あまのがたじけなくも十善の君にていらせ給へ。汝らも定めて聞き及びぬらん。去年より、隱岐の判官はやくわんが館たちに御座ありつるを、忠顯、行幸を請ひまゐらせたるなり。出雲伯耆いづもの間はらけに、いづくにてもさりぬべからんずる泊りへ、急ぎ御船を着けておろしまゐらせよ。」

と仰せられければ、船頭まことにうれしげなる氣色にて、取梶とけ面梶取り合はせて、片帆掛けてぞ馳せたりける。

今は海上二三十里も過ぎぬらんと思ふところに、同じ追風に帆を掛けたる船十艘ばかり、出雲伯耆をさして馳せ來たれり。筑紫つくし船か、商人船かと思れば、さもあらで、隱岐の判官清高、主上を追ひ奉る船にぞありける。船頭、これを見て、かくてはかなひ候まじ。これに御隠れ候へ。」と申して、主上と忠顯朝臣とを、船底に宿しまゐらせて、水手かみ梶取かんどり立ち並んで、膳ぜんをぞ押したりける。さるほどに、追手の船一艘御座船に追つついて、屋形の中に入り移り、こゝかしこ捜しけれども見出し奉らず。さてはこの船には召されざりけり。もし、怪しき船や通りつる。

と問ひければ、船頭、

「今夜の子の刻ばかりに、千波の港を出て候ひつる船にこそ、京上じやうじやう藤かとおぼしくて、冠とやらん着たる人と、立烏帽子たてえぼし着たる人と、二人乗らせ給ひて候ひつれ。その船今は五六里も先立ち候ひぬらん。」

と申しければ、

「さては、疑ひもなきことなり。はや、船を押せ。」

とて、帆を引き梶を直せば、この船はやがて隔たりぬ。さてこそ、主上は虎口を御遁れあつて、御船は時の間に、伯耆の國、名和の港に着きにけり。

六條の少將忠顯朝臣、一人先づ船より降り給ひて、

「この邊には、いかなる者が弓矢取りて人に知られたる。」

と問はれければ、道行く人立ちやすらひて、

「名和の又太郎長年と申す者こそ、その身さして名ある武士には候はねども、家富み一族廣うして、心ある者にて候へ。」

とぞ語りける。忠顯朝臣、よくくその子細を尋ね聞きて、やがて勅使を立てて仰せられけるは、

「主上、隱岐の判官が館を御遁れあつて、今この港に御座あり。長年が武勇上聞に達せし間、御頼みあるべき由を仰せ出さるるなり。頼まれまゐらせ候べしや、否や。速かに勅答申すべし。」

とぞ仰せられたりける。

名和の又太郎は折ふし一族ども呼び集めてゐたりけるが、舎弟小太郎左衛門の尉長重進み出でて申しけるは、

「われら、かたじけなくも十善の君に頼まれまゐらせて、かばねを軍門にさらすとも、名を後代に残さんこと、生前の思ひ出死後の名譽たるべし。唯一筋に思ひ定めさせ給ふより、外の儀あるべしとも存じ候はず。」

と申しければ、又太郎を始めとして、當座に候ひける二十餘人、皆この議に同じけり。

「さらば、やがて合戦の用意候べし。定めて、追手も後よりかり候らん。長重は、主上の御迎へにまゐつて、すぐに船上山へ入れまゐらせん。方々は、やがて打ち立つて、船上へ御参り候

べし。」

といひ捨てて、鎧一縮して走り出でければ、一族五人、腹巻取つて投げ掛け、皆高紐しめて、共に御迎へにぞ参じける。

にはかの事にて、御輿などもなかりければ、長重着たる鎧の上に荒ごもを巻いて、主上を負ひまゐらせ、鳥の飛ぶが如くにして船上へ入れ奉る。長年、近邊の在家に人を廻し、

「思ひ立つ事ありて、船上に兵糧を揚ぐることあり。わが倉の内にあるところの米穀を、一荷持ちて運びたらん者には、錢を五百づつ取らすべし。」

と觸れたりける間、十方より人夫五六千人出でて來たりて、われ劣らじと持ち送る。一日がうちに、兵糧五千餘石運びけり。その

後、家中の財寶ことごとく人民百姓に與へて、己が館に火をかけ、その勢百五十騎にて船上に馳せまゐり、皇居を警固仕る。

長年が一族名和の七郎といひける者、武勇の謀ありければ、白布五百反ありけるを旗にこしらへ、松の葉を焼いて煙にふすべ、近國の武士どもの家々の紋を書いて、こゝの木のもと、かしこの峯にぞ立ておきける。この旗ども、峯の嵐に吹かれて陣々にひるがへりけるさま、山中に大勢充滿したりと見えておびたゞし。

脇	遜	蟻	楮	轟	抄	欄	隔	悠	麗	笠
(130)	(123)	(118)	(85)	(75)	(57)	(45)	(37)	(20)	(12)	(5)
頰	虎	卿	泊	燕	募	唄	櫓	蝶	銘	詩
(131)	(124)	(119)	(85)	(75)	(57)	(45)	(38)	(20)	(13)	(6)
杯	孤	扶	漬	嶺	煽	曳	廓	龜	膽	忙
(131)	(125)	(119)	(85)	(75)	(62)	(46)	(40)	(21)	(15)	(6)
弔	辻	善	潔	斬	顛	尼	藩	狹	慢	懇
(133)	(125)	(120)	(86)	(77)	(62)	(47)	(42)	(22)	(15)	(6)
涯	肌	塚	臆	抵	跳	咽	麓	乞	輩	模
(135)	(125)	(120)	(86)	(77)	(62)	(48)	(42)	(29)	(15)	(6)
冠	蓋	隱	肝	抗	樽	忍	誰	畝	驚	拙
(138)	(126)	(120)	(87)	(77)	(63)	(49)	(43)	(29)	(15)	(6)
穀	搜	郡	揃	爪	隙	魔	粹	僅	鉞	甚
(141)	(126)	(120)	(88)	(77)	(66)	(55)	(43)	(32)	(16)	(7)
財	壇	幽	傍	赫	冒	玄	僕	拓	覆	誦
(142)	(126)	(121)	(90)	(78)	(73)	(55)	(44)	(33)	(17)	(7)
嵐	幣	卧	詞	炎	妨	噂	暫	隨	淒	誘
(142)	(129)	(121)	(93)	(80)	(73)	(55)	(44)	(34)	(17)	(9)
	催	遷	珍	鎖	了	暇	噴	糧	廢	旋
	(129)	(122)	(105)	(81)	(73)	(56)	(45)	(35)	(18)	(12)
	遁	爲	盆	怨	享	挨	衝	專	刊	秀
	(130)	(122)	(111)	(85)	(74)	(57)	(45)	(35)	(19)	(12)

附録

一 満洲を守つたもの

米國のポーツマスで、日露講和談判の大役をすました小村壽太郎侯は、いよいよ故國日本をさして歸ることになつた。

侯は、極度の心身疲勞のため、出發の時は、旅館から擔架に載せられて、列車にかつぎ込まれたほどであつた。太平洋航海中は、ひたすら静養したので、横濱に着く四日前から、杖を曳いて甲板を歩くことができるやうになつた。上陸後直ちに立ち働くことを思つて、つとめて歩行の稽古をしたからである。

船室では、毎日講話談判日誌を整理し、満洲經營綱領を作り、戦後の日本の

國策に就いて深く考へをめぐらしてゐた。

横濱に着く前夜、一隨員を呼んで、

「上陸の際、私に萬一のこと起つたら、私にかまはずこの書類を持つて上陸してもらひたい。病氣を推して無理に歸朝したのは、この綱領が一時も早く朝議で決定され、日本の將來を安泰にしたい一念からである。」といつて、心血を注いで作つた書類を、しかと手渡しした。

さきに侯が、講和全權委員を仰せ附けられて東京を出發した時、山なす見送人は驛頭に溢れ、萬歳萬歳の歡呼は嵐のやうに渦巻いた。この歡呼の中で、ひそかに侯は、やがて蒙るべき惡罵を豫期してゐた。さうして、たとへいかなる惡罵を浴びせかけられようとも、よしんば生命を奪はれようとも、日本の名譽にかけて起ち上り、聖旨に副ひ奉らうと堅く心に決するところがあつた。

横濱入港の日には、雨が降つてゐた。折から碇泊中の英國東洋艦隊が、帝

國艦隊とともに禮砲を放つて、侯の歸朝を迎へた。

横濱市中には、家ごとに國旗が掲げられてゐたが、小村全權入港の報が傳はると、一せいに取りおろされてしまつた。かねて講和條約に對する國民の不平不満は、かうも露骨に表されたのである。侯は、この仕打ちをまのあたり眺めながら、いたつて平靜で、眉一つ動かさなかつた。

ところが、さすが剛氣沈着な侯も、一驚を喫する事件が待ち受けてゐた。

それは、米國のハリマンと桂總理との間に、南滿洲鐵道に關する協定が取り交されてゐたことである。ハリマンの野望は、世界一周交通路を一手に握つて、世界の鐵道王に成らうとすることにあつた。この交通路を完成するのに最も難關とされてゐたのは、南滿洲鐵道をその一環中に取り込むことであり、かれは、日露戰役後の日本の經濟的疲弊につけ込み、これが買収に乗り出して來たのである。

政府は、この鐵道が果して將來重要性を有するかどうかを疑問視し、差し

當りこれが修築費の莫大なことを考へて、日米共同管理によるのが最も當を得た處置だと思つた。そこで、滿洲鐵道日米共同管理に關する覺書が、ハリマンとの間に取り交された。この覺書こそ、かれをして名實共に世界の鐵道王たらしめるものである。かれは、意氣揚々として歸國の途に就いた。これと入れ違ひに小村侯は歸朝し、上陸寸前、この契約を耳にした。

「何たる淺慮であらう。米國の資本に頭をさげ、しかも、わが國將來の國策を誤るとは。よし、萬難を排しても取り止めなければならぬ。」

侯は、愛國の熱情に燃え立つた。横濱から臨時列車が仕立てられ、やがて新橋驛に着いた。侯は、近衛騎兵一小隊の儀仗のもとに參内し、謹んで使命を復奏した。

畏くも明治天皇は、侯の勞をねぎらひ給ふ優渥な勅語をおくだしになつた。

侯は、唯感涙に咽ぶばかりである。このありがたい大御心を拜するにつ

けても、ハリマン協定を取り止めることが、聖恩に答へ奉るゆゑんであると堅く信じた。

宮中を退出したその足で、直ちに桂總理を訪ね、協定の無謀を説破し、更に井上元老を訪ねて、重ねてこのことを主唱した。續いて、山縣、伊藤の諸侯を熱心に説いて廻つた。病軀を推して、三日の間に總べてがなされたのであつた。

間もなく閣議が開かれ、席上、小村侯は、滿洲が將來日本と切つても切れない重要な地域になることを堂々と力説して、眞向からハリマン協定に反對した。しかし、強硬な反對論は次々に現れた。國を憂へる激しい論戰は、火花を散らし、議場には悽愴な氣さへみなぎつた。

侯は、決然として叫んだ。

「二十億の國帑を費し、千萬の生靈を犠牲にして、日本は何を得たか。南滿洲鐵道だけではないか。それさへも第三國の手に任せては、何を以つて

聖明に答へ奉るといふのか。何を以つて國民の赤誠に報いるといふのか。

侯の一語々は、火となつてほとばしつた。

「もし協定が取り消されないなら、即座に職を退いて、所信を國民にうつたへるばかりである。」

日頃は、極めておだやかで謙讓な侯が、この日に限つて別人のやうな激語を發した。聲淚共にくだる一言一句には、滿座の重臣たちも等しく胸を打たれた。

朝議は一決した。

間もなく、サンフランシスコに上陸しようとしてゐたハリマンの手もとに、日本から一通の電報が届いた。それは假契約を取り消す通告であつた。

二 滿ソ國境

國境の町

列車が小興安嶺を登りつめた頃、温度はぐつと降り、二重窓の中まで凍り始めた。莊嚴な滿洲の夕焼けが、白樺の疎林の中でいてついでにゐる萬物をとかさうと、僅かに朱を注いでゐる。

かつて、この小興安嶺は匪賊の巢窟であつたといふが、今やすくと、列車はわれわれを乗せて國境の町へと急いでゐる。窓外に目をやりながら、果てしない荒涼の地を流れるやうに走つて行く汽車の旅をかへりみると、滿洲國誕生以來十餘年間になされた治安のほどが、つく



づくありがたく思はれるのであつた。

小興安嶺を夜の幕がすつかり包んでしまつた頃、列車は滑るやうに北滿最端の或る國境の町へ到着した。

冬の國境の町は静まり返り、總べてのものがじつとして動かうとしない。ベチカから立ち昇る白樺の煙が、風のない町を霧のやうに低く流れて通る。ふんと鼻をつくこの香が、遠い國境へやつて來た感を深くする。

黒龍江は、町の北を、ぐつと太い線を引いて流れてゐる。幾つもの町角を曲つて、古ぼけた門をくゞつたとたん、ばつと目の前が開けた。そこには、夜の闇の中に黒龍江が巨體を横たへ、靜かに眠つてゐた。七百メートルばかり隔たつた對岸に、ちら／＼とあかりが見える。じつと耳を澄ますと、軍歌が——ソ聯の兵舎からもれて來るのであらう——かすかに風に乗つて聞えて來る。

がつては、あの町とこの町と往き來して、黒龍江によつて境された南北の

地域の物資を交換したこともあつたが、今では全く杜絶してゐる。

この夜、國境の町に三十餘年住むといふ老婦人を訪ね、ベチカで温められた部屋の中で、昔話に耳を傾けた。

「乳飲み兒をかゝへ、毎日馬車に揺られて、二十日もかゝつてこの土地にまゐつた時のことを思ひ出しますと、ほんたうに隔世の感がいたします。零下三十度の曠野を、子供を膝の上に乗せたまま、がたごと馬車の旅を續けることは、堪へられない苦痛でございました。それに、匪賊の來襲の危険にさらされてゐますので、思はず子供をしつかり抱きしめ、無事に旅のできることを神佛にお祈りしたことも、幾たびとなくありました。しかし、住めば都とか、今ではこの土地に限りなく親しさを感じて、私の骨は、後の山の頂に埋めることにきめてゐます。」

と、いかにも満足さうに笑ひながら話してくれた。

町の後の東向きの小高い丘の陰に、小さな墓地があつて、幾つかの墓碑が

立つてゐる。この町で働き、この町で亡くなつた人々のなきがらは、このさ
さやかな墓標の下で静かに眠つてゐるのである。

戸外は、いつしか風を交へ雪となつた。

國境守備隊

北の國境は、何か薄暗く、陰氣な所と想像されるが、この豫想は見事はづれ
て、底の底まで澄み通る空の青さである。内地の田舎道を思はせるやうな
一本の道が、廣々とした野中を真直に走り、遙かかなたへ消えて行つてゐる。
その道を貨物自動車で一時間も走ると、寒さのために眠氣を催し、うっかり
眠るとそのまゝ凍死してしまふといふ。車上では、横を向くことは禁物で
ある。五分間も横を向いてゐると、零下三十度の低温と、自動車の走る速さ
で、たちまち鼻が凍傷にかゝつてしまふ。正面を向いたきりの兩眼に、左右
の景色が、唯後へ後へと流れて飛んで行くのが寫る。
人影一つ見えない國境間近の山路へさしかゝつた。

「そろ／＼のろの遊んでゐるのが見えますよ。」

「狼は出ませんか。」

「晝間は出ませんね。」

といふやうな會話が、取り交されるやうになつた。

行く手の視野がだん／＼狭くなり、山の峽を貨物自動車に揺られながら
登つて行くと、荒々しい赤茶けた山肌を背に、小さな社が建てられてゐる。
白樺の鳥居が、日の光を受けて銀色に光つてゐる。兵士たちの手によつて
建てられた社である。さつ／＼と吹き渡る北滿の寒風の中に建てられた
この社は、國境の鎮めとして長くこの地を守護し給ふであらう。
守備隊の兵舎の傍らには檻があつて、狐が幾匹も飼つてある。兵士たち
が生け捕りにしたもので、兵士たちのよい遊び相手となつてゐる。山の石
で大きなひき臼を作り、牛にその臼をひかせて大豆をすりつぶし、豆腐をこ
しらへてゐる有様は、ゆつたりとした風景である。時々軍歌を勇ましく歌

ふが、その合ひ間には、部隊長自作の「山の歌」も聲高らかに歌はれる。「山の歌」といふのは、守備隊の明け暮れを歌つたもので、悠々と北の守りを固めてゐる皇軍將士の心持が、その中に歌ひ出されてゐる。どちらを向いても山ばかりのこの地點では、兵舎に寝起きする將校と兵士以外には、誰一人ゐない。だから將校と兵士とは、父と子以上の親しさで結ばれ、お互の心が暖かく融け合ひ、國境を守る」といふ唯一の目的に、總べての人の心が統一されてゐる。吹きさらしの後の山頂の望樓に立つと、遠くソ聯の土地が長々と横たはつてゐる。監視兵は交代で、夜となく晝となく國境監視の任に當つてゐる。傍らのやゝ平坦な土地では、初年兵が異様な訓練を受けてゐる。凍傷にかゝらないための訓練である。暑ければ暑くて、寒ければ寒くて、北邊防備の任に當る兵士たちは、先づ、その土地の氣候、風土と戰つて行く必要がある。この訓練を経た兵士たちは、零下三十度の營庭でも、外套を用ひないで平氣でをられるといふ。

眼鏡を片手に、北をにらんで立つ監視兵の側の粗末な柱に、誰が貼つておいたのか、紙片に一首の和歌が書き附けてあつた。

大君の御楯となりて捨つる身の思ひは輕きわが命かな

三 監視哨日記

一月十二日 晴

望樓勤務。凍結の黒龍江に、冷たい朝の光がはね返つてゐる。北風を眞向に受けるので、眼鏡をのぞいてゐると目が痛くなる。ガラス戸をしめると眼鏡のレンズが曇るので、窓は開け放したまゝなのである。

零下二十六度、記録するにも、手がこゝえて字が書けない。うつかり鉛筆のしんをなめたりすると、直ちにこれも凍つてしまふ。もちろん、萬年筆などは役には立たない。

對岸を、ソ聯の巡察兵が三名、のんきな足取りで歩いてゐるのを見かけた

ほか別に變つたことはない。



一月十三日 晴

本隊へ連絡に行つた小池一等兵が、手紙の束を持って歸つて來た。みんなわいわい騒ぎながら、かれを圍んで喜んでゐる。
「ありがたう。」

自分は一通の手紙を手にしてから、思はず叫んだ。去年の夏、慰問の綴り方を送つてくれた子供からの手紙であつた。原隊宛になつてゐたので、今頃になつて、自分の手に届いたものらしい。あの綴り方を書いた時よりも、字も文も上手になつてゐる。栗拾ひのことも書いてある。村の祭の様

子も細かに書いてある。慰問の手紙ほど、うれしいものはない。

受け取る手紙もなくて、つくねんとベチカの側に立つてゐる戦友たちに、この手紙を大きな聲で讀んでやつた。みんなも喜ぶ。

一月十四日 雪後晴

午後から望樓に登る。いつも浮彫のやうにくつきりと見える對岸の白樺の林や、兵舎などがぼんやり煙つてゐる。果して、冷たい風と一しよに、粉雪が江上から吹きつけて來た。烈しい吹雪となる。かうなると、眼鏡は全く用をなさない。目も口もあけてはゐられない。しかし、防寒帽の耳覆ひだけは、はづしてゐなければならぬ。さうして、對岸からの音響を聞きわけようと、全身を耳にしてゐるのである。

夜に入つて吹雪はからりと晴れ、寒月がさえかへり、對岸の燈火が點々と見えた。

「班長殿は、すつかりおちいさんに見えますよ。」

眞白に凍りついたひげを見ながら、かういつて笑ふと、

「おい、お前こそどうしたのだ。凍傷ぢやないか、白くなつてゐるぞ。」と、鼻の頭をさゝれた。自分はあわててこすつた。無感覺なので、これはしまつたと思つたが、次第に痛みだして來たのでやつと安心する。

一月十五日 晴

この頃、みんな顔を洗はないですましてゐる。それは、使ふ水が無いのと、うっかり水を使つて凍傷にかゝつてはならないと、用心をしてゐるからである。たとへ、顔を洗はなくても、朝日を拜むと、心の底まですがくしくなる。

今日は風呂當番なので、湯を沸かす。これも水が無いので、雪を風呂桶につめ込んでおいて、沸かすのである。解けると、また雪を入れる。幾ら入れても、水がたまらない。おまけに薪も凍りついてゐるので、燃えが悪い。煙に咽びながら火をたくうちに、どうやら水がたまり、ぬるくなり、はいれる頃

には、もう夕闇が迫つてゐた。

炊事室では、自然の冷凍魚を鋸でひき、ひいた魚肉を斧でたゞき、たゞきながら切つてゐる。

平野上等兵は、南瓜を切つてゐるが、一つくおし頂いては切るので、それを見てみんな笑つた。

「こらつ。何がをかしい。この南瓜はな——」

この南瓜は、自分たちが交代するまでこゝで勤務してゐた戦友が、空地に栽培して収穫したものであつた。せつかく収穫したのに、それをたべずに後に來る自分たちのために、ちやんと倉庫に残して置いてくれたものであつた。今までもつたいなくてたべなかつたが、凍らしてはなほ申しわけがない。それに、ちやうど明朝交代して本隊に歸る三名の戦友のために、みんなで今晚たべようといふ南瓜であつた。

一月十六日 曇

本隊に歸る三名の戦友は、今朝早く出發した。兄弟と別れるやうな氣持だ。スキーで滑走しながら歸つて行く三人の姿が、丘の稜線に見えなくなるまで、みんなで見送つた。

また吹雪模様の天氣になつて來た。おまけに、窓のガラスにすつかり氷花がついたので、部屋が薄暗く、一日中夕方のやうだつた。

一月十七日 晴

未明に非常呼集があつた。すぐ配置に就く。シベリヤの空にのしかゝつてゐる大きな闇を、じつと見つめてゐると、睡魔も寒さも、吹き飛んでしまふ。凛々たる勇氣が、腹の底から湧いて來る。

午後になつて暇ができたので、慰問袋の禮狀や、故郷の人々に手紙を書く。それから、白樺の樹皮で、靴の敷皮の代用品を作る。これは、近く本隊で、創案品や更生品の展覽會があるので、皆一生けんめいに工夫したり、作つたりしてゐるのである。慰問袋の布で作つた雪中擬装もある。古靴下利用の黒

板ふきもある。石炭の混つた岩の破片を磨いて彫つた硯や、空瓶で作つた安全燈、それから藁でこしらへた上靴、空罐の煙草盆——こんなものが、部屋の棚にたくさん並び出した。

一月十八日 晴

毎日々々、雪や氷と戦ひながら黙々と暮してゐると、思ふ存分敵と交戦してゐる南方の戦友がうらやましいとさへ思はれて來る。

北に鐵壁の護りがあつてこそ、南方の大戦果ではないか。いつも、かういはれる哨長殿の言葉を思つて、自分もこゝの守備に全力を盡くすことができる。

夜、望樓勤務。頭上近く北極星を仰ぐ。靜かな夜だ。分厚な氷層の底から、大黒龍江の流れが聞えて來さうだ。民族興亡流轉の歴史を秘めてゐるこの河のことを思ふと、いろ／＼な考へが浮かぶ。

四 蒙古草原

一

蒙古草原を行くと、よく牛車の行列に出會ふ。それは蒙古人の移動である。水草を追つて行く遊牧民の姿である。春から夏にかけて、あたりの草を家畜がたべ盡くすと、蒙古人は、部落を解き家を畳み、畳んだ家や、家具家財を牛車に積んで、更に新しい草を求めて行く。女と子供とは車に乗り、男は馬にまたがり、さうして、荷物を積んだ牛車を連れて行く。一家族で四五臺のものもあり、大家族は十餘臺、或は二十餘臺にも及ぶ。幾つかの家族が共に移動する時は、牛車の行列は幾十臺にもなる。先頭の車には、たいてい人間が乗り、犬が二三匹従ふ。それから天幕の骨組、絨毯の覆ひ、家具家財と續き、各の車の後に、次の車の牛の曳き綱を結び、最後の車の牛の首には、大きな鈴を釣りさげる。これは蒙古の牛の性質として、どうかして曳き綱が切れ



て、前の車のひつぱりがなくなると、後の牛は歩みを止める。さうすると、その後の車は皆止まる。車の行列が長いので、先頭の車に乗つてゐる人は、これを知らないで、止つた車を残してそのまま行くことがある。これを防ぐために鈴を付けるのである。鈴が、がらんがらんと音を立てて行く。車が止ると、鈴の音も止る。先頭の人、それによつて行列の切れたことに気がつくのである。それにして、あの蒙古の大草原を、牛車が幾十臺となく一列に連なり、鈴の音を草原に響かして行くさまは、いかにも大陸的でのんびりしてゐる。草原を行つて日が暮れると、蒙古人は先づ牛を車から解き、水邊に放つて草をたべさせ、車を圓形

に並べて車垣を作り、火をたき湯を沸かして茶を入れ、更に羊ウチの肉を煮て夕飯の支度をする。さうして、食事がすむと、草原に羊の毛皮にくるまつて寝る。夜が明けると、起き出てまた草原の旅を続ける。

秋から翌年の春にかけて、蒙古の草原を駱駝ラクダの車が行く。冬になれば、その車が時に橇こまに代る。駱駝が長い顔を地平線上に並べて、天地の悠久よりもつと悠久な顔をして、のたりのたりと足取り大きく、車や橇を曳いて行く。さまは、牛車よりも更に大陸的である。夏になれば、暑さに弱い駱駝は働けず、伸びた毛を刈り取られ裸はだかにされて、草原に放たれる。

蒙古の部落は、どうかするとその廣さが八キロ平方ばかりにも及び、蒙古人の家である一つの天幕から隣りの天幕まで、時には一キロも半キロも隔たつてゐることがある。ちよつと隣りまでといつても、この廣い草原をてくてく歩いてゐては、大變である。そこで、蒙古の馬が役に立つ。女でも子供でも、馬に鞭むちを當てて隣りへ行く。蒙古人は、どこへ行くにしても馬に乗

る。蒙古の馬は蒙古人の足であり、蒙古草原の交通機關でもある。丈があまり高くないので、女でも子供でも樂に乗れる。水の少い草原を長行軍して、一日ぐらゐの水を飲まなくても平氣である。蒙古人は、この馬に乗つて家畜を放牧し、又、この馬に乗つて草原に行く。

二

蒙古草原の生活に於いては、草原と家畜と人間とが緊密なつながりを持つてゐる。即ち、蒙古の家畜は草を食つて生き、人間は家畜によつて生きてゐるのである。蒙古の家畜は、草と水さへあれば



ほかには何の飼料もいらぬ。さうして、蒙古人は羊の肉を食ひ、羊の乳、牛の乳を飲み、羊の毛皮を着、羊毛の絨毯の家屋に住み、牛に車を曳かせ、馬に乗つて行く。ほしいものがあれば、家畜を賣つて求める。草原の蒙古人は、全く家畜によつて生活してゐるのである。蒙古人が家畜を飼つてゐるといふよりも、草原が家畜を養ひ、家畜が蒙古人を養つてゐるともいへるのである。蒙古の家畜は、何百何千と群れをなしてゐる。一家が少くとも羊二三百頭は持つてをり、中には羊四五千頭を持つてゐる者も少くはない。牛馬は羊に比べて数は少いが、たいてい數十頭から數百頭を持つてゐる。それらの家畜のためにも、草原は極めて広いことを必要とする。家畜はその草をたべ盡くせば、かしの草原に行き、かしの草もたべ盡くすと、更に新しい草のある所を捜し求めて行く。草原にはどこに、でも草はあるが、良い草はどこに、でもあるわけではない。又、家畜には草とともに水が必要であり、随つて蒙古の家畜は、あの廣い大草原を、良い草と水を求めて歩かなければならぬ。

ぼならない。家畜が水と草とを求めて歩き、蒙古人はまたその家畜に従つて動く。これが、水草を追ふ遊牧民の生活である。

三

大地の上に立つて物を眺めると、近くものは大きく、遠くものは小さく見える。私どもは子供の時からさう教へられた。又實際に、物の形は距離に反比例して小さく眺めてゐた。然るに、蒙古草原では遠くものが必ずしも小さくは見えない。草原の地平線上に浮かんでゐる人や馬などが、どうかすると非常に大きく見えることがある。私は、ある時草原を歩いてゐて、大空を背景に草原に立つてゐた山七面鳥が、逆光線を浴びて小牛ぐらゐに大きく見えたのに驚いたことがある。夕方など、遠く、地平線上に見える牛や馬、それから草原を行く人の姿など、驚くほど大きく見える。目の錯覚のためか、光線の屈折によるのか、わからないが、これは晴れた日の夕方、に現れる蒙古草原の一つの現象である。蒙古草原では遠く、ものが大き

く見える。随つて距離が近く感じられる。すぐそこだと思つて歩いてみると、行つても行つてもなかくそこへは到達できず、結局歩きたびれることをよく経験する。蒙古草原に始めて来た人は、かうしてよく距離の目測を誤ることがある。

又、蒙古草原を夏の強い日光に照らされながら行くと、草原の中に水を湛へて水面のきら／＼と輝いてゐるのが見える。湖だと思ひ、歡喜して進むと、その水はふつと消え失せて、そこには唯草ばかりがある。これはいはゆる「風氣樓」の一種で、昔の支那人はこれを伴水——いつはりの水——と呼んでゐる。

同じ蒙古でも、山嶽地帯を行けば、森林の間をさら／＼と流れてゐる溪川の水は、まことに美しい。それと同じく、晴天の日に草原を行けば、地面に接して大氣の流れてゐるのが實に美しい。さら／＼と日光に映じて銀色の波を立て、それが草原の草の上を打ちながら流れ動いて行く。どこにある

とは限らず、ふと眺めるとこの大氣の流れがあり、行けば消え失せ、またふと向かふの地平線に平行して銀の波を立てて流れてゐる。これも蒙古草原の夏に見る一つの幻である。(米内山庸夫ノ文ニ據ル)

昭和十九年八月十二日印刷
昭和十九年八月十五日發行

(非賣品)

著作權所有
發行者兼
文
部
省

東京都下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社

印刷者
井
上
源
之
丞

東京都下谷區二長町一番地

印刷所
凸版印刷株式會社

63.2
644

10